

サレジオ工業高等専門学校  
総合メディアセンター報  
Reports of the Media Center

第 4 号

特集「総合メディアセンターのサービス向上」

Jan. 2014  
Media Center, Salesian Polytechnic



## 巻頭言

いよいよ総合メディアセンター報は第4号の発行となりました。このメディアセンター報発行の目的は二つあり、一つはわれわれ総合メディアセンタースタッフの活動の報告をとおして、スタッフの思いを広く学内外に伝えるためです。二つ目は総合メディアセンターの活動目的である「利用者の創造力を育成する」ために、読者に創造力の基となる「ひらめき」をあたえるためです。今回は総合メディアセンターが提供している教育支援の実際を探りましたが、今回は「総合メディアセンターのサービス向上」を特集記事として構成しました。

特集記事では「サレジオ高専の情報セキュリティ強化について」と題して、昨年度、本校の情報セキュリティ強化に向けて、プロジェクトを立ち上げ情報セキュリティポリシーを作成しました。その活動報告を載せています。また図書館司書の和田さんより図書館蔵書の利用効率向上を目指して「魅力ある図書館づくり」をテーマとして、利用者のニーズに沿った分類配架についての記事が寄せられました。副校長と教務主事からは、今年から運用を開始した第2PCルーム(122室)の施設設置の目的と効果について寄稿していただいています。

一般記事では電気工学科科長の加藤先生にお願いして、学科で推奨している実験レポート作成時における文献調査のための図書館利用についての原稿をいただきました。また、総務会計課広報係の星野さんからは「Digit@Link ActiBookを用いた広報の可能性」のタイトルで、本校のホームページで利用している、電子ブック作成ツールであるActiBookの広報活動への可能性について提案がありました。このツールで取得した、電子ブック閲覧時の利用者の行動情報の利用についてまとめられています。一般記事の最後に今年度より助手として来られた竹下先生から、「ソーシャルメディアの光と影」と題して、先生の若い観点から本校学生を含む若者のSNS利用状況とその問題点について考察をいただきました。

コラムには専攻科科長大藤先生に、過去のコンピュータ達との奮闘の様子と最近の情報処理についての思いを記していただきました。一般教育科の花山先生からは、長年手を染めてきた電子工作の中から、「自作オーディオの楽しみ」として、オーディオアンプ作成にける熱い思いを寄せていただきました。情報工学科小出先生からは情報研究部顧問として部の活動状況と関信越地区学生交流会に参加した様子を率直にまとめていただいています。

連載は回を重ね、第3回「図書館より」は図書館職員の奥田さんから「より身近な図書館をめざして」をテーマに、利用者へのサービス向上活動を報告していただきました。また、センター長補佐の山館先生からは「図書館の本棚から」と「メディア博物館探訪」へそれぞれ第3回、第4回を寄稿していただいています。

総合メディアセンター報も4号の発行に至り、回を重ねるごとにますます充実してきたと実感しています。

これからもより良い情報を多く発信し、利用者により多くの「ひらめき」を与えていきたいと考えています。

2013年10月28日  
総合メディアセンター長  
米山秋文

# もくじ

## 総合メディアセンター報 第4号

	ページ
巻頭言	総合メディアセンター長 米山秋文 1
特集記事 <b>「総合メディアセンターのサービス向上」</b>	
サレジオ高専の情報セキュリティ強化について	
一般教育 米山秋文, 機械電子工学科 森 幸男, 教育支援課 和田初枝, 総務会計課広報係 星野正登	4
高専図書館利用者の教育・研究効果を促進する分類・配架法の検討	教育支援課 和田初枝 10
122PC 教室の構築	副校長 (機械電子工学科) 平岡一則, 教務主事 (一般教育) 石田 毅 12
一般記事	
レポート作成のための図書館利用	電気工学科 加藤雅彦 18
Digit@Link ActiBook を用いた広報の可能性	総務会計課広報係 星野正登 22
ソーシャルメディアの光と影 —若者の SNS 利用状況と問題点の一考察—	一般教育 竹下尚克 28
コラム	
「情報処理」雑感	専攻科 大藤晃義 34
自作オーディオの楽しみ	一般教育 花山康雄 35
学生交流会に参加して感じた事	情報工学科 小出由起夫 37
【連載】図書館より (第3回) より身近な図書館をめざして	図書館 奥田恵美 39
【連載】図書館の本棚から (第3回) 江戸近郊道しるべ	一般教育 山館 順 40
【連載】図書館の本棚から (第4回) ヴァイキングの歴史	一般教育 山館 順 41
【連載】「メディア」博物館探訪 (第3回) 大阪企業家ミュージアム	一般教育 山館 順 42
【連載】「メディア」博物館探訪 (第4回) 町田市民文学館ことばらんど	一般教育 山館 順 43
資料編 (各種データ)	
[1] 図書館・情報館関連	
(1) 入館者数	46
(2) 図書館蔵書冊数	47
(3) 図書貸出冊数	48
(a) 分野別貸出冊数	48
(b) 月別貸出冊数	48
(4) PC 教室利用状況	49
PC 教室 (123 室) 利用状況	49
ノート PC 利用状況	50
[2] WEB 関連	
(1) 年間来訪者数	51
(2) 年間来訪者数 (1 日単位での集計)	52
(3) サイト内年間ページ別セッションランキング	
リニューアル以前／リニューアル以降	53
(4) サイト内年間ページ別セッションランキング—Topics のみ	
リニューアル以前	54
リニューアル以降	55
(5) メインサイト更新件数	56
(6) 検索キーワードからのセッション数ランキング	57
編集後記	58

## 特集記事 「総合メディアセンターのサービス向上」

サレジオ高専の情報セキュリティ強化について

一般教育 米山秋文, 機械電子工学科 森 幸男,  
教育支援課 和田初枝, 総務会計課広報係 星野正登

高専図書館利用者の教育・研究効果を促進する分類・配架法の検討

教育支援課 和田初枝

122PC 教室の構築

副校長(機械電子工学科)平岡一則, 教務主事(一般教育)石田 毅

## サレジオ高専の情報セキュリティ強化について

米山秋文\*<sup>1</sup> 森幸男\*<sup>2</sup> 和田初枝\*<sup>3</sup> 星野正登\*<sup>4</sup>

### The Reinforcement for Information Security in Salesian Polytechnic

Akifumi YONEYAMA \*<sup>1</sup>, Yukio MORI \*<sup>2</sup>, Hatsue WADA \*<sup>3</sup> and Masato HOSHINO \*<sup>4</sup>

概要 本校では情報セキュリティの強化に向けて、平成 24 年度に情報セキュリティプロジェクトを立ち上げ、情報セキュリティについて学内、学外の状況を調査し、成果物として情報資産を守るために本校に即した情報セキュリティポリシー提案書を作成した。本稿では情報セキュリティプロジェクトの活動内容を報告する。

#### 1. はじめに

本校には本文で述べる情報セキュリティポリシー策定以前は、情報セキュリティに関する正式な方針や規則はなく、平成 20 年に実施された独立行政法人大学評価・学位授与機構による高等専門学校機関別認証評価の時点でまとめた検討案しか存在していない。平成 24 年の外部評価の答申において「情報セキュリティポリシーが策定されておらず、情報漏洩やウイルス感染などのリスクを抱えている。早急にセキュリティ対策を講じる必要がある。」との改善勧告が出された。

これらのことから、本校では情報セキュリティプロジェクトを立ち上げ、研究・教育活動にかかわるすべての情報資産および情報システムによって本校が管理する教職員・学生・保護者、そのすべての関係者に関する個人情報の侵害・流出・漏洩を防ぎ、システム障害などの脅威から守り、安全に保護・管理・運営し、その利益を守ることを目的として、情報セキュリティポリシーを定めることとなった。次節以降にその情報セキュリティプロジェ

クト活動内容を報告する。

#### 2. ポリシーで策定するもの

情報セキュリティポリシーには以下の 3 点を策定した。

##### a. 情報セキュリティ基本方針

組織における情報セキュリティ対策に対する根本的な考え方を表すものであり、組織がどのような情報資産を、どのような脅威から、なぜ保護しなければならないのかを明らかにし、組織の情報セキュリティに対する取組む姿勢を示す。

##### b. 情報セキュリティ対策基準

基本方針で定められた情報セキュリティを確保するために遵守すべき行為や判断などの基準で、基本方針を実現するためにしなければならない事項を示す。

##### c. 情報セキュリティ管理基準

情報セキュリティ対策基準が正しく機能しているかをチェックする方法や評価方法を示す。上記を策定するために、次の作業を行った。

##### ①現状把握

本校における情報の種類と利用方法、過去の事故やヒヤリハットなどを洗い出し、本校のセキュリティの弱点を診断した。

##### ②外部情報の収集

公的機関が発行しているセキュリティポリシーの指針を調査し、他大学、他高専、その他企

\*1 一般教育科

General Education

\*2 機械電子工学科

Department of Mechanical and Electronic Engineering

\*3 教育支援課

Educational Support Division

\*4 総務会計課 広報係

Affairs Accounting Division, PR Section

業などのセキュリティポリシーも入手した。

③提案書の作成

①および②を比較検討し、本校に即したセキュリティポリシーの草案を検討し、セキュリティポリシー提案書を作成した。

④提案書の内容確認

本校経営層が提案の内容を確認した。

⑤運用方法検討

運用ポリシーを策定し、運用方法を検討した。

⑥文章化

情報セキュリティポリシー、運用システム案のドキュメントを作成した。

作業の中でも骨子となるのは「提案書の作成」である。そのためには「何を守るか」と「どう守るか」を明確にする必要がある。そこで、コンピュータ教育開発センターが提供している学校情報セキュリティ・ハンドブック[1]を参考に「何をやるか」「何を守るか」「どう守るか」の順で作業を行い、ポリシーを完成させていった。

3. 策定の詳細

3.1. 何をやるか

「何をやるか」を策定するために事前に調査した本校におけるセキュリティ関連の事故やヒヤリハットなどのトラブル事例を検討した。次に他校でのセキュリティポリシー作成事例をもとに、情報の取り扱いルールの重要性やリスクについて共有した。また、外部団体が無償で提供しているセキュリティ診断ソフト[2]を用いて分析を行い、本校のセキュリティの弱点も調査した。結果の概要を以下に示す。

◆基準をクリアしている項目

- ①ネットワークのアクセス制御
- ②業務アプリに対するアクセス制御
- ③情報（データ）へのアクセス制御
- ④情報機器の安全な設置

◆特に評価の低い項目

- ①重要情報の業務工程ごと安全対策
- ②業務委託契約
- ③記憶媒体の紛失・盗難

◆評価の低い項目

- ①従業者への教育
- ②建物や安全区画の理的セキュリティ
- ③書類・記憶媒体の適切な管理
- ④ソフト導入・開発時のセキュリティ管理
- ⑤情報システム障害対策
- ⑥情報セキュリティ事故対応手続き
- ⑦事業継続への取り組み実施
- ⑧情報セキュリティ管理規定
- ⑨情報セキュリティ推進体制
- ⑩情報資産の重要度分類

診断結果から、現状の情報セキュリティではハードウェアやネットワークやデータのアクセスについては問題ないが[3]、管理体制や人が関わる点に多くの問題を含むことが判明した。

なお、どのレベルまでポリシーを作り込むかを検討した結果、べからず集では現実の運用が破綻すると判断し、情報漏洩時のリスクと守り方の事例を提供していく事となった。

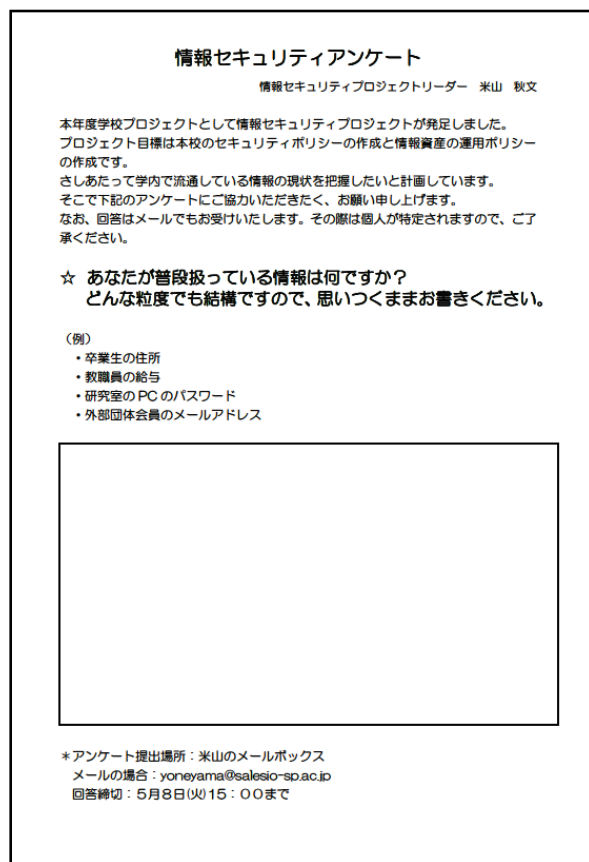


図1 情報セキュリティアンケート

特集「総合メディアセンターのサービス向上」

3.2. 何を守るか

「何を守るか」では情報セキュリティアンケートにより教職員が関わる情報を書き出してもらい、学内の情報資産を洗い出し、保存状態、保存場所、複製の有無などを整理した。図1に情報セキュリティアンケート用紙を示す。

アンケート集計や部署への聞き取り調査の結果、本校における情報には、個人情報をはじめ研究情報など多種多様な「種類」の情報があり、内部情報と外部情報という「分類」も存在する。これらの組み合わせにより、情報資産事故(漏えい、消失、破損)時の被害レベルが変動することは明らかである。そこで被害レベルを想定するために、本人特定容易度、消失影響性、機微性をもとに情報の重要度の設定を行った。また、これらの観点から、「重要度」総合判定を実施し、セキュリティポリシー適用プライオリティの高い情報を抽出した結果、個人情報を含む情報が重要度の大きな情報資産であることが明らかとなった。それとは別

に見えてきた問題がある。1点目は、情報のマスターに対して、そこから派生するコピーが多く混在して、何が本当の情報なのか見分けが付かなくなっている事である。2点目は情報の廃棄ルールがなく、発生した情報は長く存在し、ますます混沌とさせている点である。図2に分類した情報資産と重要度の一例を記す。

3.3. どう守るか

「どう守るか」のステップではリスク分析として脅威とその原因、脅威の頻度、発生時の被害の大きさおよび、脅威に対する対策のレベルからリスクの評価を行い、脅威のレベル分けを行った。そのために、まず重要度の高い情報が含まれる情報資産をピックアップし、その情報資産に対して、前述の情報資産事故の観点から「脅威とその原因」を想定した。そして、この脅威について頻度と発生時の想定被害レベルから「脅威の評価」を行い脅威のレベル分けを行った。さらにこの脅威に対する現状の対策のレベルから「脆弱性の評価」を

情報の種類	その情報が記載されているモノ	管理者	作成者	保存形態	マスター	重要度評価			
						本人特定	消失	機微性	重要度総合判定
在校生の個人情報	教務システム	教務課	教務課	電子媒体	M	3	3	3	大
在校生の個人情報	成績一覧(教務システム内)	教務主事	教務課	紙	C	2	2	3	中
在校生の個人情報	成績通知表(教務システム内)	教務主事	教務課	紙	C	2	2	3	中
在校生の個人情報	在学証明書(教務システム内)	学生課	学生課	紙	C	3	2	1	中
在校生の個人情報	欠課時数・欠席日数(教務システム内)	教務主事	教務課	紙	C	2	2	2	中
在校生の個人情報	保健調査書(入学時に提出)	学生課	医務係	紙	M	3	3	3	大
在校生の個人情報	指導要録	学生課	学生課	紙	M	3	3	3	大
在校生の個人情報	学生指導記録	学生部	?	電子媒体	M	2	3	3	大
在校生の個人情報	学生指導記録	教務部	?	電子媒体	M	2	3	3	大
在校生の個人情報	学生指導記録	学生部	?	紙	C	2	2	3	中
在校生の個人情報	学生指導記録	教務部	?	紙	C	2	2	3	中
在校生の個人情報	健康診断結果	学生課	学生課	電子媒体	M	2	3	3	大
在校生の個人情報	健康診断結果	学生課	学生課	紙	?	2	1	3	中
在校生の個人情報	サレジオ名簿(アクセス)	学生課	学生課	電子媒体	C	3	3	3	大
在校生の個人情報	住所録(サレジオ名簿からVIP25名へ)	学生課	学生課	紙	C	3	2	2	大
在校生の個人情報	各種届出原本(退学)	教務	学生課	紙	M	3	3	3	大
在校生の個人情報	各種届出原本(住所変更など)	学生課	本人	紙	M	3	1	1	中
在校生の個人情報	診断書等(長期欠席・試験・行事欠席)	教務部	外部人員	紙	M	2	3	3	大
在校生の個人情報	住民票	学生課	外部人員	紙	M	3	1	2	中
在校生の個人情報	誓約書(保証人情報を含んでいる)	学生課	外部人員	紙	M	3	3	3	大
在校生の個人情報	中学校成績	学生課	外部人員	紙	M	2	3	3	大
在校生の個人情報	学生証	学生課	学生課	紙	C	3	2	1	中
在校生の個人情報	ID・パスワード	メディアセンター	メディアセンター	電子媒体	?	3	2	3	大
在校生の個人情報	ID・パスワード	個人	メディアセンター	紙	?	3	2	3	大
在校生の個人情報	ID・パスワード	個人	メディアセンター	記憶	?	3	2	3	大
在校生の個人情報	ID・パスワード	個人	メディアセンター	アクセスログ	?	3	1	3	大

図2 情報資産と重要度の例



行った. この脅威の評価と脆弱性の評価から「リスクの評価」を行った. 図3に重要度大の情報資産のリスク評価例を示す.

次にリスクの対応策を検討するでは, これまでの作業で抽出された情報は重要度が高かったため, すべてに対し「リスク対応策」を検討することとした. 脅威とその原因をもとに「リスク対応策」

として「リスクを低減する」, 「リスクを回避する」, 「リスクを移転する」, 「リスクを保有する」の4つの観点から検討を行った. 図4にリスクの対応策例を示す. その結果, すべての脅威については無いものが多い事が判明した.

次に上述の4つの観点から想定された対応策に

情報資産	種別	脅威	脅威の原因	脅威の評価		脆弱性の評価 レベル	リスクの評価
				頻度	大きさ		
サレジオ名簿	消える脅威	データコピーしたUSBメモリなどの紛失による漏えい	USBメモリの運用ルールがない	1	3	3	9
サレジオ名簿	消える脅威	非公認の複製による漏えい	運用ルールが不十分(結構できて)	1	3	1	3
サレジオ名簿	消える脅威	クライアントPCがウイルス等に感染したことによる漏えい	ウイルス対応実施が個人レベル	1	3	2	6
サレジオ名簿	消える脅威	サーバーがウイルス等に感染したことによる漏えい	ウイルス対応実施が組織レベル	1	3	1	3
サレジオ名簿	消える脅威	外部ネットワークからのハッキングによる漏えい	ファイヤーウォールが脆弱	1	3	1	3
サレジオ名簿	消える脅威	学内ネットワークからのハッキングによる漏えい	モラル低下	2	3	2	12
サレジオ名簿	消える脅威	情報機器処分時のデータの消し忘れによる漏えい	廃棄時のルールが明確でない	1	3	3	9
サレジオ名簿	消える脅威	個人認証におけるなりすましによる漏えい	Pass, IDの管理が不徹底	2	3	2	12
サレジオ名簿	消える脅威	ディスプレイの盗み見による漏えい	PCが起動したまま(スクリーンセーバー等無)	1	3	2	6
サレジオ名簿	消える脅威	教職員による意図的な漏えい	SNSなどの運用ルールがない	1	3	3	9
サレジオ名簿	消える脅威	誤プリントアウトによる漏えい	情報を守るという意識が低い	1	3	3	9
サレジオ名簿	消える脅威	個人バックアップデータの不適切な扱いによる漏洩	個人のバックアップルールがない	2	3	3	18
サレジオ名簿	消える脅威	無線LANを利用したアクセスによる情報の漏洩	無線LAN運用ルールが不十分(無いに近い)	1	3	2	6
サレジオ名簿	消える脅威	無線LANを利用したアクセスによる情報の漏洩	イレギュラーなサービスエリア(WiFiなど)が存在しうる	1	3	2	6
サレジオ名簿	消える脅威	パソコン・サーバの盗難, 紛失による情報消滅	固定が不十分	1	3	1	3
サレジオ名簿	消える脅威	インフラの損傷などによる情報喪失	サーバ上のデータは, バックアップをしているが災害対策はしていない	1	2	3	6
サレジオ名簿	消える脅威	誤消去等, 人為的なトラブルによる情報消滅	教職員が不慣れで起こりえる	2	2	2	8
サレジオ名簿	見えなくなる脅威	学校内パソコン等のウイルス感染による業務停止	ウイルス対応実施が個人レベル	1	1	2	2
サレジオ名簿	見えなくなる脅威	サーバ, システム等のダウンによる業務停止	システムを冗長化していない	1	1	1	1
サレジオ名簿	見えなくなる脅威	外部ネットワークからの攻撃による業務停止	想定外の攻撃	1	1	1	1
サレジオ名簿	見えなくなる脅威	学内ネットワークからの攻撃による業務停止	想定外の攻撃	2	1	1	2
サレジオ名簿	見えなくなる脅威	停電による業務停止	UPSの許容量オーバー	1	1	1	1
サレジオ名簿	見えなくなる脅威	システムの誤用など人為的なミスによる業務停止	教職員が不慣れで起こりえる	2	1	1	2

図3 重要度大の情報資産のリスク評価例

脅威	脅威の原因	リスク対応策			
		低減	回避	移転	保有
データコピーしたUSBメモリなどの紛失による漏えい	USBメモリの運用ルールがない	ルールを作る	USBの利用禁止	なし	なし
非公認の複製による漏えい	運用ルールが不十分(結構できて)	運用ルールをしっかりと作る	非公認の複製を禁止する	なし	頻度低いそのまま
クライアントPCがウイルス等に感染したことによる漏えい	ウイルス対応実施が個人レベル	運用ルールをしっかりと作る	なし	なし	なし
サーバーがウイルス等に感染したことによる漏えい	ウイルス対応実施が組織レベル	常時監視	なし	なし	頻度低いそのまま
外部ネットワークからのハッキングによる漏えい	ファイヤーウォールが脆弱	常時監視	なし	なし	頻度低いそのまま
学内ネットワークからのハッキングによる漏えい	モラル低下	啓蒙活動	なし	システム管理を業者に委託	なし
情報機器処分時のデータの消し忘れによる漏えい	廃棄時のルールが明確でない	ルールを作る	なし	データ消去業者に移転	なし
個人認証におけるなりすましによる漏えい	Pass, IDの管理が不徹底	管理方法の教育	なし	認証方法の変更	なし
ディスプレイの盗み見による漏えい	PCが起動したまま(スクリーンセーバー等無)	管理方法の教育	なし	なし	なし
教職員による意図的な漏えい	SNSなどの運用ルールがない	ルールを作る	SNSの利用を禁ずる	なし	なし
誤プリントアウトによる漏えい	情報を守るという意識が低い	啓蒙活動	なし	なし	なし
個人バックアップデータの不適切な扱いによる漏洩	個人のバックアップルールがない	ルールを作る	個人的バックアップを禁ずる	なし	なし
無線LANを利用したアクセスによる情報の漏洩	無線LAN運用ルールが不十分(無いに近い)	ルールを作る(パスワード)	禁止	なし	なし
無線LANを利用したアクセスによる情報の漏洩	イレギュラーなサービスエリア(WiFiなど)が存在しうる	管理方法の教育	禁止	なし	なし
パソコン・サーバの盗難, 紛失による情報消滅	固定が不十分	ハードの物理管理の徹底	なし	なし	頻度低いそのまま
インフラの損傷などによる情報喪失	サーバ上のデータは, バックアップをしているが災害対策はしていない	サーバの物理的補強	遠隔地にバックアップをもつ	業者委託	なし
誤消去等, 人為的なトラブルによる情報消滅	教職員が不慣れで起こりえる	啓蒙活動	なし	なし	なし
学校内パソコン等のウイルス感染による業務停止	ウイルス対応実施が個人レベル	運用ルールをしっかりと作る	なし	なし	なし
サーバ, システム等のダウンによる業務停止	システムを冗長化していない	全ての機器を冗長化	なし	なし	頻度低いそのまま
外部ネットワークからの攻撃による業務停止	想定外の攻撃	機器の高機能化	なし	なし	頻度低いそのまま
学内ネットワークからの攻撃による業務停止	想定外の攻撃	啓蒙活動	なし	なし	なし
停電による業務停止	UPSの許容量オーバー	機器の高機能化	なし	なし	頻度低いそのまま
システムの誤用など人為的なミスによる業務停止	教職員が不慣れで起こりえる	啓蒙活動	なし	なし	なし

図4 リスクの対応策例

特集「総合メディアセンターのサービス向上」

ついて「技術面・経済面から総合判定」を行った。図5に技術面・経済面からの総合判定例を示す。それらを機能ごとにグルーピングし、プロジェクトの上位目標を明確にした。これを元にセキュリティポリシーの目次ドラフトを作成し、内容を最低限満たすための項目を設定した。図6に目次ドラフトを示す。このドラフトの適応対象者と適応範囲を設定し、本校の情報資産管理のあるべき姿の事例を人的およびシステムの側面から記していった。

3.4. だれが守るか

これらセキュリティポリシーを正しく運用管理するために、以下の組織と責任者を明確にした。次に組織ごとの責任者とその役割を記す。

- ①セキュリティポリシーを検討する組織  
(情報セキュリティ責任者)
  - ・情報セキュリティポリシーの継続的な評価・改善の指示
- ②セキュリティ対策を実行する組織  
(情報セキュリティ管理者)

管理状態の定期確認 01 Passの定期確認 を 実施する	技術面 ○ 経済面 △ 総合 ○		運用ルールをしっかりと作る 02 情報の いざわたる範囲 を 明確にする	技術面 △ 経済面 △ 総合 △
管理状態の定期確認 02 Passの 文字数制約 を 設定する	技術面 ○ 経済面 ○ 総合 ○		運用ルールをしっかりと作る 01 5W2H を 明確にする	技術面 ○ 経済面 ○ 総合 ○
管理状態の定期確認 03 Passの 文字種制約 を 設定する	技術面 ○ 経済面 ○ 総合 ○		管理方法の教育(啓蒙) 01 講演会 を 開く	技術面 ○ 経済面 △ 総合 ○
管理状態の定期確認 04 ユーザーのPassの 管理状態(アナログ を 確認する & デジタル)	技術面 ○ 経済面 △ 総合 ○		管理方法の教育(啓蒙) 02 マニュアル を 整備する	技術面 ○ 経済面 △ 総合 ○
管理状態の定期確認 05 パソコンの設定(ス クリーンセーバー を 確認する 等)	技術面 △ 経済面 △ 総合 △		管理方法の教育(啓蒙) 03 試験 を する	技術面 △ 経済面 ○ 総合 ○
管理状態の定期確認 06 ウイルスの 更新状況 を 確認する	技術面 △ 経済面 △ 総合 △		管理方法の教育(啓蒙) 04 定期研修 を 行う	技術面 △ 経済面 △ 総合 △
管理状態の定期確認 09 全PC を サレジオドメイン 傘下にする	技術面 ○ 経済面 △ 総合 ○		管理方法の教育(啓蒙) 05 検定制度 を 導入する	技術面 × 経済面 △ 総合 △
管理状態の定期確認 07 プリントアウト 制限 を 確認する	技術面 × 経済面 × 総合 ×		管理方法の教育(啓蒙) 06 ヘルプデスク を 常設する	技術面 ○ 経済面 × 総合 △
管理状態の定期確認 08 書類の ライフサイクル を 確認する	技術面 △ 経済面 △ 総合 △		管理方法の教育(啓蒙) 07 チェックリスト を 日々つける	技術面 △ 経済面 ○ 総合 △

図5 技術面・経済面からの総合判定例

<b>第1章 基本方針</b>	
・情報セキュリティポリシーを定める目的	
	学生及び教職員の利益を守る為 責務 関係者からの信頼を得る為 法令順守
・本文書の概要、構成	
・運用方法	目的は普遍的だが、具体的手順は外部環境により流動的 年度ごとに評価し、見直しをかける。
<b>第2章 組織と適用対象者</b>	
・セキュリティポリシーを検討する組織	
・セキュリティ対策を実行する組織	グループ 具体的な部署名は別表 個人 教職員(常勤・非常勤)や学生 ※ 時限的一時利用者を含む
・セキュリティポリシーを監査する組織	
・非常時対応する組織(復旧に当たるチームと外部に対する渉外を行うチーム)	
・F高専48.49条を入れる。	
<b>第3章 適用範囲</b>	
・情報資産の定義(具体例は別表)	
・管理レベルと管理エリア	
<b>第4章 情報資産の取扱い</b>	
・目的	人的な漏えいを防ぐ・・・
・手段	情報資産については別紙参照 啓蒙活動も含まれる ソフト開発(例:シラバス入力システム)と外部委託のルールも忘れずに。
<b>第5章 情報機器の取扱い</b>	
・目的	機械的な漏えいを防ぐ・・・
・手段	情報資産については別紙参照 調達、廃棄などのルールは別表
<b>第6章 雑則</b>	
・違反と例外措置	
・監査協力	
・F高専50条を入れる。	
<b>第7章 附則</b>	

図6 目次ドラフト

- ・情報セキュリティ対策の立案
- ・情報セキュリティ対策実施の指示
- ・情報セキュリティ対策が実施の確認
- ・情報セキュリティ対策の改善案の立案,  
セキュリティポリシー改善提案
- ③セキュリティポリシーを監査する組織  
(情報セキュリティ推進責任者)
  - ・情報セキュリティ対策の改善指示
  - ・情報セキュリティ責任者への対策運用状況  
の報告
  - ・情報セキュリティポリシー改善の議論

#### 4. おわりに

これまで述べてきたように、本校の情報資産を守るために、情報セキュリティ強化に向けて、情報セキュリティポリシーを作成した。その内容は情報セキュリティ基本方針と情報セキュリティ対

策基準、情報セキュリティ管理基準からなる。実施手順を盛り込まなかったのは、各部署が持っている情報資産や扱いが変わるため、すべての部署に当てはまるものは難しいと考えたためである。そのため、今後プロジェクトメンバーが各部署の情報管理責任者と共にその部署に合った実施手順を考え、それらについての「PDCAを回す組織とルール」を明確に設定していく。

#### 文 献

- [1] 学校情報セキュリティ委員会, “学校情報セキュリティ・ハンドブック”, 財団法人コンピュータ教育開発センター, pp.1-23, 2007.
- [2] IPA 情報セキュリティ対策診断  
[http://www.ipa.go.jp/security/benchmark/benchmark\\_tokuc\\_hover31.html](http://www.ipa.go.jp/security/benchmark/benchmark_tokuc_hover31.html)
- [3] 米山秋文ほか, “サレジオ高専の学内情報システムにおける情報資産の信頼性向上”, 教育システム情報学会第 36 回全国大会講演論文集, pp.84-85, 2011.

## 高専図書館利用者の教育・研究効果を促進する分類・配架法の検討

和田 初枝<sup>†</sup>

### A Study on Classification and Shelving to Effectively Facilitate Users' Learning and Research in Technical College Libraries

Hatsue WADA<sup>†</sup>

**概要** サレジオ高専総合メディアセンター図書館（以下、サレジオ高専図書館）は教育・研究に必要な資料を系統的に収集し利用者に提供している。これらの資料は日本十進分類法[1]（以下、十進分類法）に基づいて分類、配架している。しかしこの方法では資料が主題別に散らばってしまい、教育・研究カリキュラムに即した体系的な分類・配架が行えず、利用者の利便性を損なっている現状が確認された。そこで過去の貸出データの分析と教育・研究カリキュラムとの関連から利用者のニーズに即した効果的な資料提供を実現する分類・配架法の提案ができるのではないかと考えた。本稿ではこの研究について説明する。

#### 1. はじめに

デザイン学科、電気工学科、機械電子工学科、情報工学科、専攻科の学生と教員を主たる利用者とするサレジオ高専図書館では、他のほとんどの図書館と同様、十進分類法を適用した分類・配架が実施されている。このため資料が主題別に散らばってしまい、学科の教育・研究カリキュラムに即した体系的な分類・配架ができず、利用者への利便性が損なわれている現状が確認された。そこで利用者インタビューを行い、現行の分類・配架が利用者のニーズに合ったものであるかを検証した。さらにその結果に基づき一部の分野の分類・配架方法を変更したが、根本的な解決には至っていない。

利用者の利便性を考慮した分類・配架の先行事例として、米国アリゾナ州マリコパ群立図書館ペリー分館では書店の棚づくりに類似させた配架方法を採用している[2]。日本でも八日市市立図書館等の国内のいくつかの図書館で、図書館員の知識と経験により関連主題や設定テーマ別に工夫された配架を行っている[3]。さらにカルチャ・コンビニエンス・

クラブが指定管理者となって、2013年4月にリニューアルオープンした佐賀県の武雄市図書館は、書店のようにジャンルごとにまとめた独自の22進の分類法による資料の提供を行っている[4]。

サレジオ高専図書館でも十進分類法による分類・配架で損なわれている利用者の利便性の根本的な解決を図っていく必要がある。そこで単に図書館員の経験等に頼るのではなく、図書館の利用者の興味の対象が比較的限定されているという、高専の図書館の特徴を活かし、過去の貸出データの分析と、教育・研究カリキュラムとの関連から、利用者のニーズに即した効果的な資料提供を実現する分類・配架法の提案を行うことができないかと考えた。次節以降でこの研究方法の詳細について述べる。

#### 2. 研究の概要

本研究は、過去の貸出データのバスケット分析[5]による分析結果を教育・研究カリキュラム、主に教科書や参考書の書評、参考文献等のテキストマイニング[5]の結果と関連づけ、その結果を利用して資料の新たな主題分野による分類・配架方法を決めていくというものである。分析に利用する貸出データには個人情報が含まれるが、本研究で行う分析

---

<sup>†</sup>教育支援課  
Educational Support Division

では個人が特定されるデータは利用しない。そして部分的ではあるが新たな主題分野で資料を再度分類し、授業関連コーナーという形で配架し、その有意性を検証する。これにより、教育・研究効果を促進する高専図書館のあり方を実現する分類・配架法の確立を目指すものである。さらにこの方法は他の教育機関の図書館でも応用可能であり、教育・研究効果を促進するという点で意義を持つものと考えられる。

### 3. 貸出データ分析

教育・研究に利用される資料の利用傾向および関連性を明らかにするために、同時に貸出処理された資料の組み合わせを把握する。そのために過去の貸出データについて、データマイニング手法のひとつであるバスケット分析を行う。次にバスケット分析で得られた結果について、資料の主題分野を特定するためにテキストマイニングを行う。テキストマイニングには教科書、参考書、それらの書評、参考文献等といった教育・研究カリキュラムに関連した資料の情報を利用する。例えばインターネット上に公開されている書評を用いたクラスター分析等を行って、授業で用いる教科書や参考書に関連して抽出したキーワードは、主題分野の特定に利用できるものとなる。こうして特定した主題分野にしたがって、主題分野のグルーピングを行い、それに基づいた分類法を作成する。

### 4. 実践方法の検討

新しい分類・配架方法の実践は分析結果にもよるが、特にカリキュラムに関連し、かつ利便性が損なわれている分野を中心に行っていきたいと考えている。なぜなら、実際に新しい分類・配架方法を実践していくためには、図書館システムにおける表示方法や館内の案内方法など運用面で検討しなければな

らない点が数多く発生するからである。なお運用面での実践方法を検討するために、図書館システムにおける表示方法や館内の案内方法について、2013年7月に佐賀県の武雄市図書館へのインタビュー調査も実施した。そして実際に運用を行った後、利用状況に加えて利用者アンケート調査からその効果を検証する。

### 5. おわりに

今後データマイニングの分析結果とインタビュー調査によって得られた知見を併せて、高専図書館利用者の教育・研究効果を促進する分類・配架法を実践し、さらなる利用者サービスの向上に努めていきたい。なお、本研究は科研費奨励研究(25907044)の助成を受けた。

### 謝辞

本研究指導者である北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科、吉田武稔教授には貴重なご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

### 文献

- [1] 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会, 図書館情報学用語辞典, 第3版, 丸善, 2007.
- [2] The New York Times 記事, “Dewey? At This Library With a Very Different Outlook, They Don’t”, <http://www.nytimes.com/2007/07/14/us/14dewey.html>, 最終確認日 2013-10-07.
- [3] 國松 恵子, 斎藤 民男, 西尾 恵一[他], “魅力的な棚づくり-利用者に分かりやすく探しやすい配架の研究(特集 図書館の排架とサイン計画)”, 図書館雑誌, 第99巻, 3号, pp.165-169, 2005.
- [4] 楽園計画編, 図書館が街を創る。:「武雄市図書館」という挑戦, ネコ・パブリッシング, 2013.
- [5] 多田実, 文系のための理系的問題解決:Excel で実践する数理的・統計的分析アプローチ, オーム社, 2008.

## 122PC 教室の構築

平岡 一則<sup>†</sup>, 石田 毅<sup>‡</sup>

### Review of room assignments to locate the new computer lab

Kazunori HIRAOKA<sup>†</sup>, Takeshi ISHIDA<sup>‡</sup>

**概要** PCを使った授業が増えてきた。それに伴いPC教室の使用希望も増えてきたが、PC教室は1つしかないで、時間割が組めない状況となっていた。ノートPCを購入あるいはレンタルして、一般教室で授業を行ってきたが、学内に膨大な数のノートPCが存在することになり、保守管理に多大な稼動がかかっていた。事務部門も含めた大がかりな部屋の再配置をすることで、学校全体の機能を低下させることなく、新たに60席を有するPC教室が構築できた。

### 1. 背景

校舎内の全ての部屋は、事務部を含めた全部署に割り振られている。そのため、PC教室が1つしかないで時間割が極めて困難であったにも関わらず、簡単に増設できない状況にあった。

その対策として、メディアセンターでノートPCを購入して学科に貸し出す、あるいは各学科でノートPCを購入またはレンタルして一般教室で授業を行ってきたが、ネットにつなぐことが困難であり授業内容に制約があった。さらには、学内に膨大な数のノートPCが存在し、保守管理に多大な稼動がかかるようになってきた。これらを解決するため、新規にPC教室を構築することとなった。

また、一昨年度より本格的に始めた入学後教育[1]についても、拠点となる部屋探しに苦労していた。入学後の補習授業体制は今後とも拡大継続する方向であり、専用教室をPC教室増設とセットで検討してきたが、この問題については本稿では触れない。

このように、現状の硬直化した部屋割りでは、今後起きるであろう状況の変化に対応できないと判断した。

そこで、現状を分析して使用頻度の少ない部屋を洗い出し、PC教室を捻出するための再配置案を策定し、各方面の協力を得て実施することとした。

### 2. 現状分析

一般教育、専門4学科、専攻科および事務部や会議室、共通講義室等の専有面積を調べた。本校の部屋は、教室の半分の大きさ(ドア1枚分)を基本単位として間仕切りされている。電気工学科、情報工学科の教員研究室がそれに該当する。この広さを1として、校舎の配置図を基に、学科別の専有面積を数えた(表1)。その結果、デザイン学科と電気工学科の専有面積が他学科に比べ広いことが分かった。この2学科についてヒヤリングを行い、使用頻度の低い部屋および学科間で共有できる教室の洗い出しを行った。

デザイン学科の118室(広さ2)は写真スタジオおよび写真加工に使われているが使用頻度が低く他の部屋に移動可能であること、電気工学科の講義室110教室(広さ2)はプロジェクタを有しており他学科とも共有できることが分かった。

そこで、この2つの部屋を持駒として、部屋の再配置の検討に取りかかった。

<sup>†</sup> 副校長(機械電子工学科)

Vice-principal (Department of Mechanical and Electronic Engineering)

<sup>‡</sup> 教務主事(一般教育)

Dean of Academic Affairs (General Education)

### 3. 計画立案と実施

まず、必要なPC教室の規模を検討した。クラス単位の授業なので、クラスの最大人数を収容しなければならない。各専門学科の入学定員は45名であるが、入学者数は学科間にばらつきがあり、定員を大幅に超えることもある。例えば、24年度の機械電子工学科は56名、25年度の情報工学科は60名である。これらの事情を勘案して、60人収容できるPC教室を構築することとした。

またPCのタイプについては、メディアセンターで性能や価格を総合的に検討して、デスクトップ型に決めた。

デスクトップPCを60人分収容するのに必要なスペースを検討した結果、普通教室の広さでは無理であり、入試募集課が使用している122室(広さ2以上)なら可能であることが分かった。しかも122室は、既存の123PC教室の隣なので、サーバやケーブル敷設にも効率的である。

しかし122室は、入試募集課で必要となる4つの機能(応募者受付、印刷、入試資料置き場、制服等の各種展示)を果たすために使用されており、簡単には動かせる部屋ではなかった。本校の学生募集の中枢であり、学校の顔ともなっている部屋である。この部屋の代わりとなりうるのは、231室しかないが、現在はプロジェクタ完備の会議室および教室として頻繁に使われている。

以上の状況を整理すると、以下の制約条件の中で解を見つけるという問題となる。

- ・ 入試募集用の122室をPC教室に転用する。
- ・ 入試募集用の部屋を231室に変更した場合、231室の会議室と教室(プロジェクタ付き)としての機能の受け入れ先を確保する必要有り。
- ・ 学科専有の110教室(広さ2)と118室(広さ2)は転用可能

事務部門からは、122室に集約されている入試募集用の4つの機能を異なる部屋に分散させてもよいとの了承を頂いた。この4つの機能を118室と231室に分散することによって、表2に示すような配置

換えの解が得られた。

118 デザイン科室については、入試募集の印刷機能(入-2)と資料置き場機能(入-3)を入れる。それでも余裕があったので、写真加工機能(AD-2)はそのまま残し、写真スタジオ機能(AD-2)だけをデザイン科の4階の部屋に移動することとした。この部屋に未だ余裕があることを、今後活かしていきたい。

110 電気工学科室はプロジェクタを完備した講義室となっていたので、231室の講義機能(共-2)をここに移すこととし、全学科共用の講義室として使用する。

231 会議室は、正門大階段を登って建物に入ったときに最初に見る教室であり、まさに学校の顔である。ここに入試募集の応募者受付機能(入-1)と各種展示機能(入-4)を入れる。周囲のロビーも入試募集課での利用を最優先の場所とする。

以上で、現況の各部屋の有する機能を無くすことなく、再配置ができた。

本計画が最終的に了承されたのは2012年11月である。その後118室、122室およびデザイン学科4階の部屋の改修を行い、60席のPCを設置し、2013年4月の新学期開講に間に合わせた。この間、メディアセンターおよび事務部の方々には工期が短い中でご尽力を頂いた。ここに感謝の意を表したい。

### 4. 今後

PC教室の新設に伴って、不要となった学科所有のノートPCを整理・廃棄を推し進める。また、PC教室の活用を促進するために、導入ソフトについても継続的に改善していく必要がある。

PC教室以外でも、学校には補習室や面談室など必要な部屋がまだ不足している。「全体最適は部分最適の和に勝る」を指針として、これからも学校全体の最適な部屋割りを目指していきたい。

### 文 献

- [1] 杉本文司, 平岡一則, 他7名, プレテック学生に対する補習体制の構築とその効果, サレジオ工業高等専門学校研究紀要, 第41号掲載予定, 2013

表1 学科別の専有面積(配置換え前)  
(ドア1枚分の部屋面積を1とする)

棟	階	AD	EE	ME	CS	専攻科	一般*2 プレ	会議室 講義室 事務等
北側	1		14	2				8
	2		8			8		8
	3		8	8	8			
	4				24			
中央	1	2	4.5	2		1	5	4
	2		1	1		2	6	4
南側	1	12*1						図書 募集室
	2						24	
	3	4		20				
	4	24						
総計		42	35.5	33	32	11	35	24

\*1 : 奥行きが標準の1.5倍

\*2 : 体育館を除く



表2 部屋の配置換え計画

部屋番号	現況		変更後		備考
122	入試募集	(入-1)応募者受付 (入-2)印刷 (入-3)入試資料置場 (入-4)各種展示	メディア	第2PC教室(新設)	授業のみで使用 放課後開放はしない
118	AD	(AD-1)写真スタジオ (AD-2)写真加工	入試募集	(入-2)印刷 (入-3)入試資料置場 (AD-2)写真加工	(AD-1)はAD科4F移設
110	EE	(EE-1)講義	教務	(共-2)講義(プロジェクタ)	(EE-1)はEE科内で吸収
231	共通	(共-1)会議室 (共-2)講義(プロジェクタ)	共通	(共-1)会議室 (入-1)応募者受付 (入-4)各種展示	周囲のロビー等も活用



## 一般記事

レポート作成のための図書館利用

電気工学科 加藤雅彦

Digit@Link ActiBook を用いた広報の可能性

総務会計課広報係 星野正登

ソーシャルメディアの光と影 ―若者の SNS 利用状況と問題点の一考察―

一般教育 竹下尚克

# レポート作成のための図書館利用

加藤 雅彦<sup>†</sup>

## Using the Library for Preparing Reports

Masahiko KATO<sup>†</sup>

概要 高等教育機関で学ぶ学生は、卒業までに数多くのレポートを作成していかなければならない。工学系の実験レポートにおいては書き方の流れが決まっており、実験結果についての考察を科学的根拠に基づいて行うための文献調査が必要となる。本稿では、電気工学科の学生がレポート作成のための文献調査を行う上で、図書館をどのように利用しているか把握するため、電気工学科の1~5年生に対してアンケート調査を行った結果を報告する。

### 1. はじめに

技術者にとって、報告書（レポート）の作成は技術を人に伝えるための手段として欠かさないものであり、誰もが納得できるように書かなければならない。工学系のレポートの書き方は言語が違ってても世界共通であり、目的→方法→結果→考察→結論→参考文献という流れとなる。研究論文執筆の場合は、自分と同じ研究が過去に行われていないか、同様の研究の場合は過去の報告との違いは何か、を調べるために学術雑誌などの文献調査を主に行うが、学生実験の場合は、実験結果についての考察を科学的根拠に基づいて行うための文献調査となる。従って、“誰もが納得できるような”考察を行うためには、信頼のおける専門書を調べなければならないはずだが、このことがわかっていないと科学的根拠のない自分勝手な考え方で書かれた考察になってしまう。信頼のおける著者・出版社の本を参考にしたことが書いてあれば“誰もが納得できる”報告といえるだろう。

さて、最近ではインターネットで何でも簡単に調べることができるため、文献調査といってもまずインターネットで調べようとする学生が多い。中には

考察もインターネットで済ませようとする。インターネットで質問を投げかけると誰かが答えを用意してくれるようである。そして、その答えを単純に信じてしまう。果たしてそれは科学的根拠に基づいた考察といえるだろうか？インターネットは調べたいキーワードを入力して検索することが多いが、それでは調べたいキーワードしか調べられない。ただし、偽情報も多いが。本を調べるというのは、インターネットのようにただ単に調べたいキーワードだけを調べるのではなく、特に専門書ではそれに関連する項目の学習も兼ねている。また、インターネットのように答えをすぐに見つけれられるとは限らないので（インターネットで調べた答えが正しいかどうか分からないが）、じっくり本を読んで内容を理解し、正しい答えにたどり着くしか方法はない。学生は調べたいことだけを単に調べればいいのではなく、調べる過程を通して関連する項目を学習し、考え、まとめる力をつけているのである。人に聞くだけ、インターネットで答えを探すだけが続けていると、いつまでたっても力はつかない。時間はかかっても専門書を読んで自分で答えを導く力を養ってもらいたいと思う。

### 2. 電気工学科のレポート指導

前述したように、工学系のレポートは流れが決ま

<sup>†</sup>電気工学科

Department of Electrical Engineering

っており、この流れに沿って書けるよう、配布するレポート表紙の裏面には自己チェックシートがついている。学習効果などを考え、ボールペンでの手書きとしており、図はちょっとした丸や直線でも定規やテンプレートを使って書くことを徹底している。参考文献は専門書を引用することとしており、インターネットは禁止している。そのため、電気工学科のほとんどの学生が図書館を利用していると思われるが、今後のレポート指導の参考にするため、レポート作成のためにどのように図書館を利用しているか、実態を把握するためアンケート調査を行った。

### 3. 図書館利用アンケート調査結果

前期末の時点で、電気工学科の1～5年全学生に対して図書館利用についてのアンケート調査を行った。質問事項は以下の通りであり、いくつかの結果についてまとめたものを図1～5に示す。

1. 図書館の利用頻度はどれくらいですか (図1)
2. レポート作成のために図書館を利用していますか (図2)
  - ・科目は何ですか (図3)
  - ・主な利用方法 (図4)
  - ・借りる冊数
  - ・利用する本の名前
3. レポート作成以外で授業の予習・復習のために図書館を利用していますか (図5)
4. 希望の図書をどうやって探しますか (図6)
5. レポートを作成する上で図書館への要望があれば書いて下さい (表1)

図1は図書館の利用頻度についてであるが、2、3年生がよく利用していることがわかる。1年生は実験レポート数が少ないためそれほど利用頻度は高くないが、最も実験レポート数の多い4年生の利用頻度が低いのが気になる。5年生の利用頻度も低いが、5年生の実験は後期のみであり、アンケートを行ったのが前期末だったためかもしれない。しかし、卒業研究は行っているわけであるから、もう少し図書

館に通ってもらいたい。図2より、2、3年生のほとんどはレポート作成に図書館を利用しているが、1、4年生は30%、5年生は20%の学生が利用していないと答えており、文献調査をどうやっているのか詳しく調べる必要がある。図3より、実験レポート作成のために図書館を利用している学生が多いが、実験以外のレポートではほとんど利用していない。図4より、利用方法としては「じっくり閲覧する」や「閲覧して借りる」ことが多いことから、初めから本を決めて図書館に来る学生は少なく、図書館に来てから本を選んでいることがわかる。後述する学生からの要望にもあるように、本が少ないという意見が見られることから、実験内容に関する専門書を充実させていく必要がある。図5より、レポート作成以外で図書館を利用する学生は少ない。普段の勉強でわからないことがあっても本を調べることは少なく、誰かに聞くか、インターネットで調べているのであろうが、力をつけるためには自分で本を読んで調べるができるようになってほしいものである。図6より、希望の図書は半分以上の学生が書架を探していることがわかる。PCによる検索システムは20%程度の学生しか利用していないため、使い方がよくわからないのか、あるいはもう少し使いやすくする工夫が必要がある。

最後に、図書館への要望を表1にまとめた。学年別に、本、閲覧、検索、環境に関するものに分類した。1年生だけ閲覧に関する要望があるが、本の探し方に慣れていないようである。本に関しては、多くの学年で数が少ないという意見が多かった。実験は10名程度のグループで行うことが多いが、レポート作成時に調べたい本が集中してしまうことが原因であると思われる。利用頻度の高い本は冊数を増やしたり、内容的に同じ本を増やすなどの対策が必要である。環境に関しては、自習スペースに関する要望が見られた。現状は、閲覧スペースは十分とはいえないまでも確保されているが、落ち着いて勉強できる仕切られた一人用の自習スペースはない。高等教育機関の学生にとって、図書館での学習は重要であり、自習スペースの設置が望まれる。これにより図書館に足を運ぶ学生も増えると思われる。

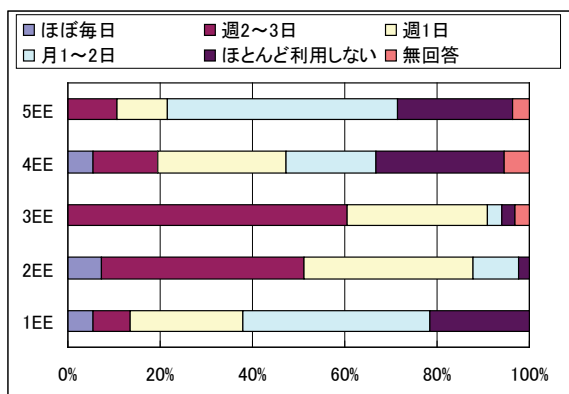


図1 図書館の利用頻度

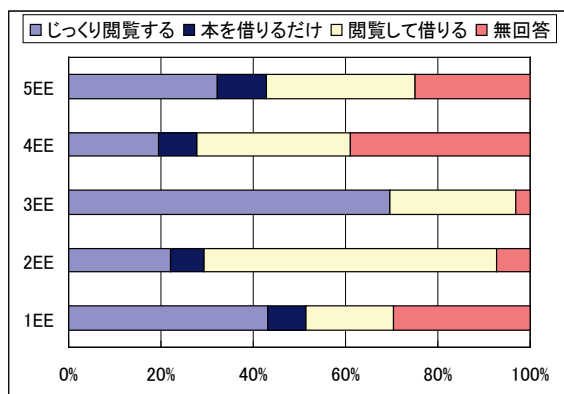


図4 主な利用方法

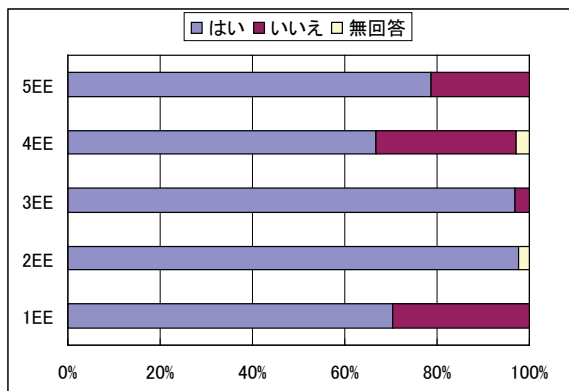


図2 レポート作成のために図書館を利用しているか

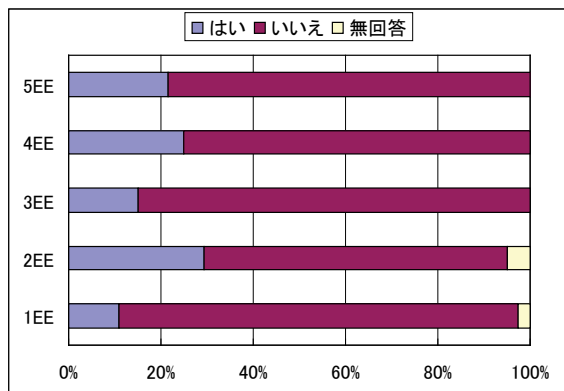


図5 レポート作成以外で授業の予習・復習のために図書館を利用しているか

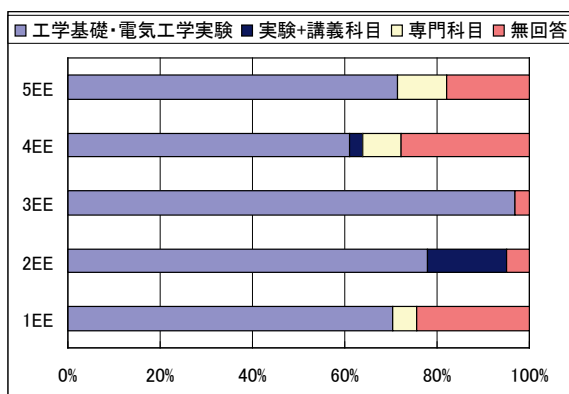


図3 レポートの科目名

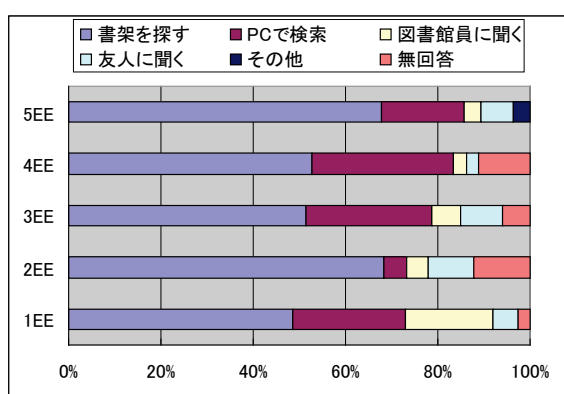


図6 希望の図書をどうやって探すか

表1 レポートを作成する上での図書館への要望

1EE	
図解カラーの電気系の入門書を増やしてほしい 授業で使用するような、電子部品の説明がたくさん のっている資料	本
種類別に分けてほしいです 専門科目ごとの棚が欲しい 学科ごとに本棚を作り、レポートのときなどに本を 探しやすくしてほしい 学科ごとに本を分けてもらいたい	閲覧
2EE	
最新の専門書がほしい レポートではないが全学年全ての教科書を置いて ほしい もっと細かいとこまで書いてある本を多くおいてほ しい 実験にあった本がなかなかない！！ 実験にあった本がないときがある 本が少ないです 一つの本を1冊ではなく5、6冊おいてほしい	本
PCで検索する際、本の中の索引を検索できればよ い	検索
実習スペースがもう少しほしい	環境
現状で満足している	
3EE	
資格関連の本を増やして欲しい(過去問) 同じ本を3冊、4冊と数を増やしてほしい 同じ本を2から3冊置いてほしい	本
相談できる場所がほしい 机の仕切りが少し邪魔です。消しカスを捨てられる ようなゴミ箱、ちりとりがあれば片付けやすいです 机の仕切りが邪魔だと思います 飲食可、ゲーム禁止(カードゲーム含む) 飲食を可能にしてほしい	環境
4EE	
分野に偏りがあって、目当ての本が無いことがあ るので増やしてほしい 電気に関する本の種類を増やしてほしい レポートの考察に役立つ本をもっと置いてほしい	本
低学年がうるさいので、図書館で集中ができない ので、もう少し処罰してほしい	環境
5EE	
場所が少ない 一人席がほしい	環境

#### 4. おわりに

高等教育機関にあって図書館は学校の教育レベルを表す重要な設備である。インターネットの普及が進み、ニュースや新しい技術、論文など、即時性が求められる情報はインターネットに軍配が上がる。しかし、インターネットでは検索で目的のものしか調べられないことが多く、細切れで内容が断片的になってしまう。そのため、インターネットで調べものをしてあまり勉強にはならない。勉強を目的としているならば、体系的にまとめられている本が最良である。インターネットの情報は本当か嘘か見分ける力がないと使いこなすのは難しいが、勉強中の学生にとっては、専門的な内容が正しいかどうか見分ける力がないため情報を鵜呑みにしがちである。その点本はよく精査されており、出版社が責任をもって発行しているので信用できる。実験レポートの文献調査で専門書をよく読み、理解する力をつけて初めてインターネットの情報が本当であるかどうか、たとえ最新の情報であってもそれが正しいかどうか見分ける力がつくのである。

最近、インターネットがないと調べもののできないという学生が増えているが、これは自分で調べる力がないということである。今回のアンケート調査によって、実験レポート作成における図書館の利用状況を把握することができた。今後、レポートにおける参考文献の指導に生かしていきたいと思う。

#### 謝辞

アンケート調査に協力して頂いた電気工学科の全学生とアンケート用紙を集計して頂いた1～5年各学年の実験主任に感謝いたします。

# Digit@Link ActiBook を用いた広報の可能性

星野 正登<sup>†</sup>

## Possibility of Public Relations using the Digit@Link ActiBook

Masato HOSHINO<sup>†</sup>

概要 かつて学校パンフレットをはじめとするアナログ媒体を用いた広報では、その効果測定の多くが経験と勘による暗黙知領域にあったと言える。しかしながら技術の進歩に伴い、これまでは計測が困難であった「アナログ媒体における閲覧者の興味関心の可視化」は少しずつ可能となってきた。本報告書は、平成 25 年度より導入を開始した「Digit@Link ActiBook」により、既存の紙媒体における閲覧者の興味関心の可視化を試みることで、前述の暗黙知の形式知化に挑戦し、今後の広報への可能性を示すものである。

### 1. 課題の背景

ここでは、課題の背景をあきらかにすることで本試行を導入した経緯を明確にしてゆく。なお、文中の図は本校のアクセス解析などの実際のグラフ等を用いたが、内部情報である事や、紙面限界からも数値ではなく、イメージ図として参照して頂きたい。

かつてホームページを始めとする Web 媒体が存在しない頃は、アナログ媒体を用いた広報が主流であり、「印刷・製本された学校案内」等の広報ツールにより各種ステークホルダー（情報受信者）への広報が実施されていたと言える。したがって、図 1 のように、一旦ステークホルダーの手元に渡った情報はステークホルダーのコントロール下にあり、配布した側（情報発信者）はステークホルダーがどの情報（コンテンツ）に興味を持ったかを知る事は困難であったと言える。

無論「困難」とは「不可能」を指すわけではなく、この時代のマーケティングリサーチとしては、直接的な対話や、間接的なアンケートにより「互いの立場を考慮した上での表層的なデータ」を収集する事は可能であった。しかし、直接的もしくは間接的なリサーチには、前述した「互いの立場を考慮する」

というバイアスが発生する可能性も否定できず、それゆえに、収集した情報には、信頼度のバラつきが生じると言える。つまりアナログ媒体を用いた広報において「情報受信者が本当に興味を持っているコンテンツがなんなのか」を明らかにする事はこの段階では困難であったと言える。

その後、Web 媒体が爆発的な発達を遂げ、多くの組織がオフィシャルサイト（組織が公式に管理する Web サイト）を保有する時代が到来した。サレジオ工業高等専門学校（以下本校）においてもそれは例外ではなく、数回のリニューアルを経て、図 2 のように現在のオフィシャルサイトを用いた広報が行われるようになった。

この事により、本校を含む多くの組織は、より高速かつ広域に多様なステークホルダーに対してリーチをかける事が可能となったと言える。すなわち広報は Web 媒体の進化に伴い、アナログ媒体による広報とベストミックスしながら、情報発信の多様性を手に入れたと言える[1],[2],[5]。しかし同時に多様なリスクも併発したと言える。一つはソーシャル・メディアの急速な発達によるデータの多様化と極大化であると言える。まずソーシャル・メディアについて整理してゆく。ソーシャル・メディアとは、ティム・オライリー（2005）の提唱する Web2.0 の概念を具現化した一つの形であると考えられる。Web1.0 とは図 2 の説明で記したように、ネットワークインフ

<sup>†</sup>総務会計課 広報係  
Affairs Accounting Division, PR Section



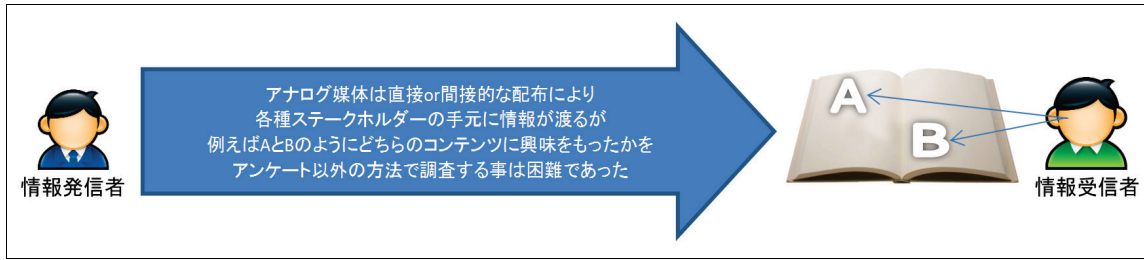


図1 アナログ媒体でのPR

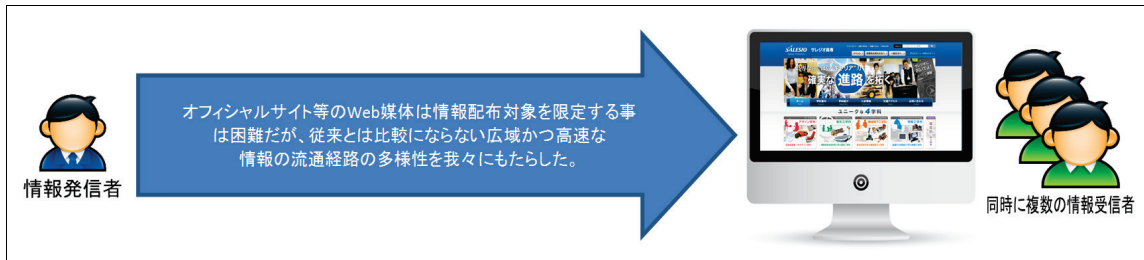


図2 Web媒体でのPR

ラの爆発的な普及により、限定的ではあるがユーザーが世界に対して情報を発信できた状態を指し、情報の流れとしては単一方向であったと言える。これに対し Web2.0 はその情報を見たユーザーがそれに対して自身の意見をフィードバックできた状態であると言える。この時点で、Web を介した様々なメディア（自社サイトや個人ブログ、2ch 等の電子掲示板等）によりある種「仮想現実的な社会」とユーザーはそれぞれにインタラクティブ（双方向的）に繋がっていたと言え、それらを総じてソーシャル・メディアと呼ぶ事ができると言える。そして現代の Web3.0 と呼ばれる段階においては、前述の「仮想現実的な社会」と「それぞれに繋がっていたユーザー」同士がさらにリアルタイムで繋がりはじめた状態であると言える。代表的なソーシャル・メディアとして例を挙げるならば、mixi、Facebook、Twitter、Google+ 等の SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）、ブログ等のコミュニティ、Wikipedia 等のナレッジコミュニティ、ニコニコ動画、Youtube 等の動画投稿サイト等が挙げられる。この Web3.0 という状

態においては、アクセス解析などのオウンドメディア（owned media：自社コントロール下にあるメディア）マーケティングリサーチや、SNS を用いたマーケティングリサーチを「併用する事」が閲覧者の興味関心を可視化する上で極めて重要な手段であったと言える。例えば、アクセス解析単体で見た時、図3のように複数年度の時系列変化を比較しただけでは時折発生する特異点の「原因」までは解析が困難である。

しかしながらアクセス解析の多様な機能を用いれば「原因の推定」は可能ではある。例えば特異点の日付を抽出し、その日に発生した閲覧者の動きを細かく解析してゆくと、何故その日閲覧者が増えたのか、あるいは減ったのかを、例えば図4のような閲覧者の行動フローデータや、図5のような検索キーワードデータ、図6のような検索地域データ、のような多様な観点（いつ、どこから、何を、どのように閲覧しているか）を用いることで閲覧者の行動特性を立体的に可視化し、特異点の発生した原因を推定する事が可能になると言える。

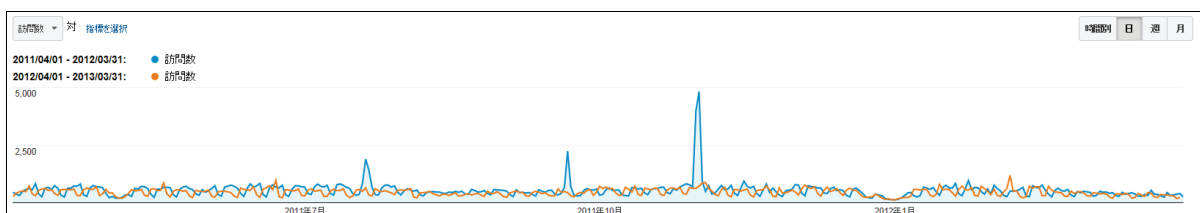


図3 アクセス解析による時系列変化

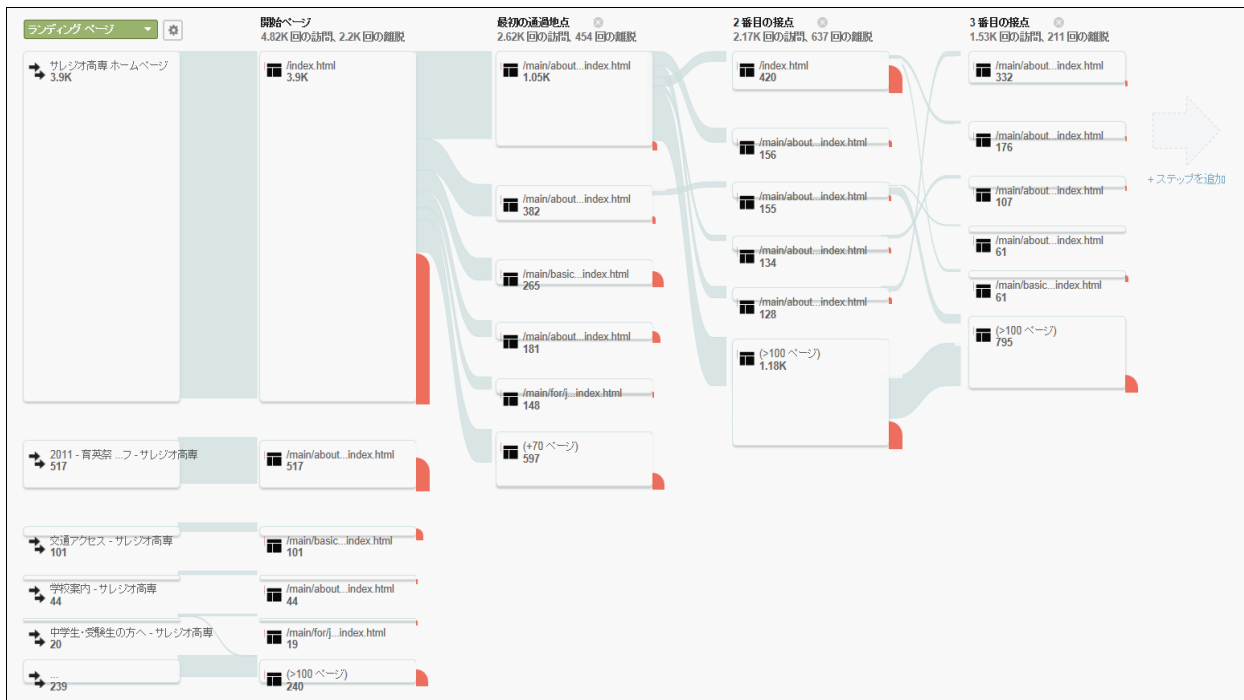


図4 アクセス解析による閲覧者の行動フロー

キーワード	訪問数	訪問数(%)
1. サレジオ工業高等専門学校	630	35.75%
2. サレジオ高専	388	22.02%
3. %e3%82%b5%e3%83%ac%e3%82%b8%e3%82%aa%e5%b7%a5%e6%a5%ad%e9%ab%98%e7%ad%89%e5%b0%82%e9%96%80%e5%ad%a6%e6%a0%a1	199	11.29%
4. サレジオ	111	6.30%
5. %e3%82%b5%e3%83%ac%e3%82%b8%e3%82%aa%e9%ab%98%e5%b0%82	80	4.54%
6. %e3%82%b5%e3%83%ac%e3%82%b8%e3%82%aa	23	1.31%
7. サレジオ高専 学園祭	11	0.62%
8. sarejio	9	0.51%
9. サレジオ工業高等専門学校	9	0.51%
10. 「サレジオ工業高等専門学校	7	0.40%

[レポート全体を見る](#)

図5 アクセス解析による検索キーワードデータ

検索地域	訪問数	訪問数(%)
1. Yokohama	482	10.00%
2. Shibuya	392	8.13%
3. Shinjuku	291	6.04%
4. Minato	275	5.71%
5. Osaka	212	4.40%
6. Chiyoda	189	3.92%
7. Nagoya	114	2.37%
8. Saitama	107	2.22%
9. Fukuoka	92	1.91%
10. Otsuki	84	1.74%

図6 アクセス解析による検索地域データ

つまり、何らかの原因で閲覧数に大幅な変化があり、それについて原因を想定し、次の広報にどのように反映させてゆくかといった Web マーケティングにおけるデミングサイクル (Plan→Do→Check→Action) を回すためには、オフィシャルサイトを含

む何らかの広報活動を展開したのち、アクセス解析等の手法を用いてオウンドメディアマーケティングにより展開した広報活動に対するリアクションを可視化し、「閲覧者が本当は何に興味関心を持っているのか」について仮説を立て、さらにアードメデ

メディア (earned media : 自社コントロール下でない SNS などのメディア) を客観的にリサーチする必要がある。アードメディアマーケティングリサーチの手法の一例としては、バイラルマーケティング (Viral marketing: ウイルスの感染・増殖に例えた商品などの情報が人づてに伝わってゆく仕組み) を前提としたリサーチ手法が挙げられる。前述したような、mixi、Facebook、Twitter、Google+等の SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス)、ブログ等のコミュニティ、Wikipedia 等のナレッジコミュニティ、ニコニコ動画、Youtube 等の動画投稿サイト等は、今や誰もが簡単に利用できる時代となった。この事により様々な問題はあれど、「情報受信者が情報を閲覧した際の生の声」は、図 7、8 のように Web 上にあふれていると言える

つまりここに無造作に書きなぐられる情報受信者のリアクションとは、アンケートやヒアリングのようなリサーチ手法だけでは拾いきれない「互いの立場を考慮しない深層的なデータ」が得られる可能性

が高い[3]。無論、匿名性故に信頼度の粒度の問題はあるが、匿名故に貴重な指摘が内包されている事も多いと言える。ここまでは Web 媒体の発達により、これまで「配布した側 (情報発信者) はステークホルダーがどの情報 (コンテンツ) に興味を持ったかを知る事は困難であった。」という事実が変容してきた事を記した。しかしこれでもまだ「紙媒体におけるスタークホルダーの興味・関心の深層的なデータ」を情報発信者が入手し、デミングサイクルに論理的なアプローチをかける事は困難であったと言える。以上を理解した上で、本報告書の「Digit@Link ActiBook」による、紙媒体における閲覧者の興味関心の可視化について考察してゆく。

## 2. 課題の整理

課題の背景にも記したように、Web 媒体の急速な進化により、Web 媒体を通じて行われた広報は Web 媒体により様々な深層的データを取得する事が可能とな



図 7 Twitter による情報受信者のリアクション



図 8 Youtube による情報受信者のリアクション

った。しかし、紙媒体においてはまだそれは技術的に困難であると言える。つまり現状における課題とは、リサーチ機能の急速な発展により、デミングサイクルの回り始めた Web 媒体によるマーケティングに対して、紙媒体を用いたマーケティングは未だリサーチ機能に深層的なデータを得る仕組みが不十分である事であると言える。

### 3. 課題へのアプローチ

しかしながら、既存の紙媒体を電子化する事で、Web 媒体と連動させ、紙媒体のどこに興味を持ったかを可視化する技術が開発された。それが本報告書のタイトルに記した「Digit@Link ActiBook」である。

これは既存のパンフレットなどの紙媒体をPDF等のように一旦電子化し、それを e-book 化する事で、Web 媒体と連動させ、閲覧者が電子化された紙媒体の「どの部分をズームしてきているか」すなわち「興味・関心を持った可能性がある部分がどこなのか」をグラフィカルに可視化する機能を備えた新たなマーケティングツールであると言える。なお図9はスターティアラボ株式会社公式サイト <http://ebook.digitalink.ne.jp/>より引用した「Digit@Link

ActiBook」運用のイメージ図である。この技術により仮想的にはあるが、図10のように我々は、既存の紙媒体において閲覧者がどの部分に興味・関心を持ったか仮説を立てるための新たな手段を手に入れたと言える。電子化された既存の紙媒体は、PC やタブレット端末を通して情報受信者に提供され、情報受信者はそれを今まで紙を見ていた時と同じような感覚で閲覧する。その際、興味があり、より詳しく知りたいと閲覧者が感じた時、その部分をズームすると仮定すると、そのズームした箇所を知る事が出来れば、閲覧者の興味関心の志向性をうかがい知る事が出来ると考える[3]。図11は、上記のズームした箇所を可視化する「Digit@Link ActiBook」のヒートマップ機能のイメージ図である。

なおヒートマップとは、よくズームされる箇所を赤、その次を緑。のように「ズームされた箇所をその頻度によって色彩で可視化する機能」である。

この方法で仮想的にはあるが、図12のように紙媒体は Web 媒体と同様のマーケティングリサーチ機能を手に入れる事が可能となり、広報媒体としてのPDCAのうち、C (Check) 機能を向上させる事が可能となったと言える[4]。

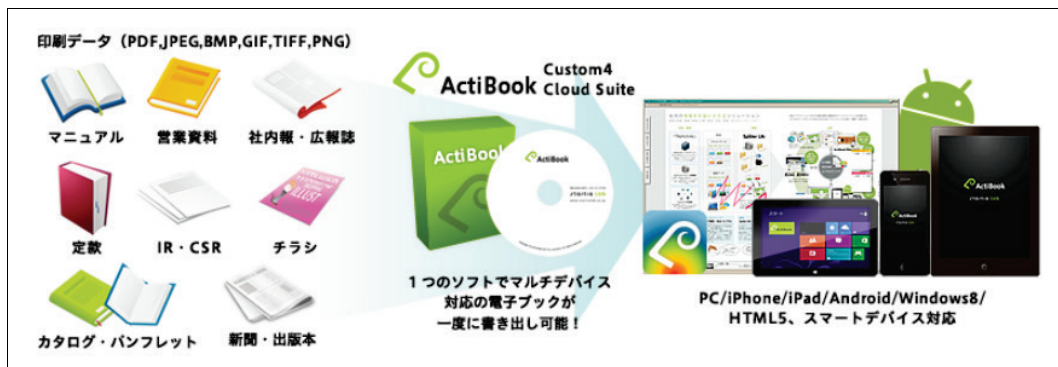


図9 「Digit@Link ActiBook」導入のイメージ図



図10 「Digit@Link ActiBook」運用のイメージ図

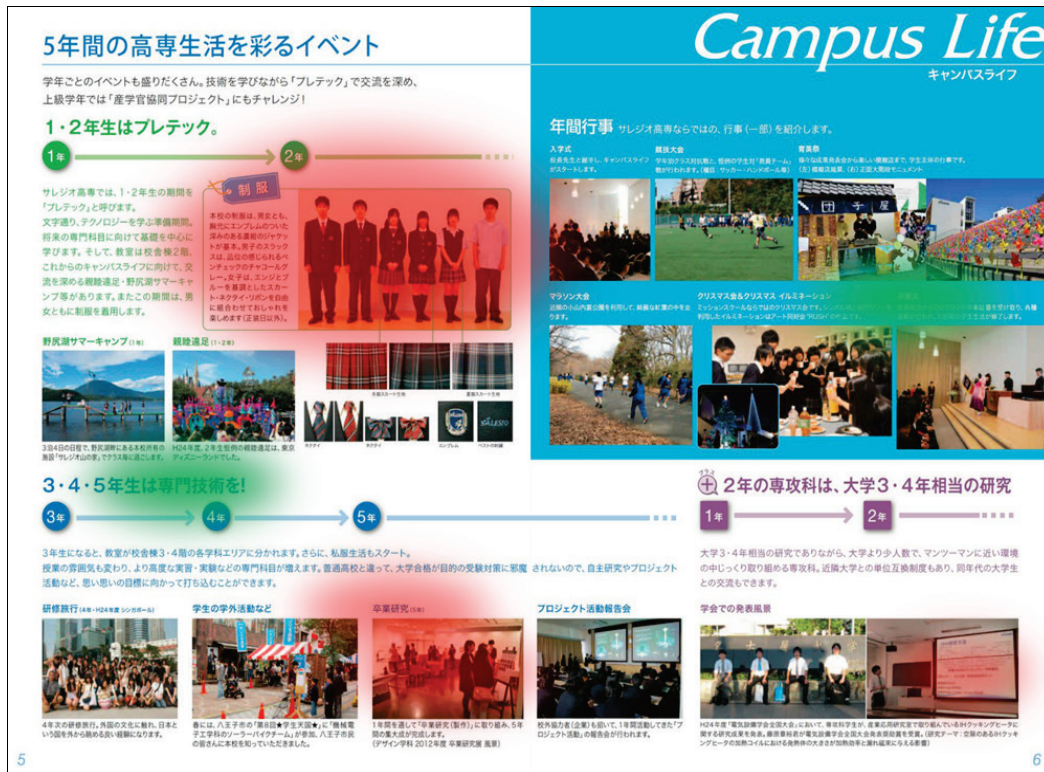


図 11 どこを見たか可視化するヒートマップのイメージ

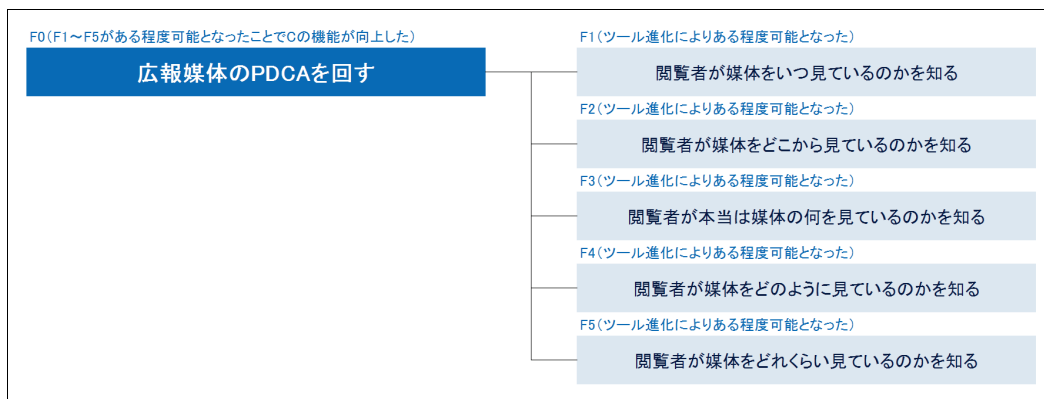


図 12 広報媒体のPDCAを回すための機能群

#### 4. 結論

無論、「3. 課題へのアプローチ」で示した方法には「単純に字が小さかったので拡大した」という事象も含まれるわけなので、この測定方法にはまだまだクリアすべき課題がある。しかしながら、日々進化を続けるこれらのツールを「手段」として正しく認識し、ツールの導入を「目的」とせず、トライアル&エラーを繰り返しながら最適解に近づく努力を継続してゆけば、Digit@Link ActiBook を用いた広報の可能性とはさらなる広がりを持つと考える。

本年度は導入したばかりであり十分なデータが取れていないが、今後もこれらのツールの各機能をベストミックスしながら、広報の実効性を高める手法を追求してゆきたい。

#### 文献

- [1] グロービス・マネジメント・インスティテュート, MBA マーケティング, ダイヤモンド社, 2005
- [2] 藤江俊彦, 現代の広報, 同友館, 2002
- [3] 松波晴人, ビジネスマンのための「行動観察」入門, 講談社現代新書, 2011
- [4] 土屋裕, 新・VE の基本, 産業能率大学出版部, 1998
- [5] P.Kotler and K.L.Keller, Marketing Management 12<sup>th</sup> Edition, Peason Education Inc., 2008

# ソーシャルメディアの光と影

## —若者の SNS 利用状況と問題点の一考察—

竹下尚克<sup>†</sup>

### Positiveness and Negativeness of Social Media - Problems with the utilization and condition of SNS for the young people -

Naokatsu TAKESHITA<sup>†</sup>

概要 ソーシャルメディアを用いない日があるだろうか. そのような社会の中にあつて若者はどのようにソーシャルメディアを使っているのか. ソーシャルメディアを使うことによって利用者同士のつながりが促進されてきているのか. 現在の日本におけるソーシャルメディアの利用状況と本学学生の SNS・Twitter の利用状況を踏まえながら, ソーシャルメディアに起こりうる問題点・課題を具体例を用いて考察していく.

## 1. はじめに

インターネットの普及とともにパソコンや携帯電話・スマートフォンが日常生活に欠かせないものとなってきている. その中で近年, 広く用いられるようになったのが SNS やマイクロブログ (Twitter など) といったソーシャルメディアである. ソーシャルメディアが発展してきなかで, インターネット上・人と人との面と向かって話をしていない場所といった常に目が届いていないところで問題が起こっている.

本稿では若者のソーシャルメディアの利用状況と直面しうる問題に関して考察していく. また, 発展していく中での課題についても整理していく.

## 2. ソーシャルメディアとは

ソーシャルメディアとは「ブログ, ソーシャルネットワークワーキングサービス (以下, SNS), 動画共有サイトなど, 利用者が情報を発信し, 形成していくメディアのことで, 利用者同士のつながりを促進する様々なしかけが用意されており, 互いの関係を視覚的に把握できるのが特徴である」[1]. このように示されているソーシャルメディアは使用用途に応じて様々な使い方があつる. 今現在, 主に使われているソーシャルメディアを下記の表に示した. 各々のソーシャルメディアについての説明と主な利用サイト名を示す(表 1)[1].

表 1: 主要ソーシャルメディアの一覧

ブログ	時系列に並べられた日記風の記事と, それについてのコメントが定期的に更新されるウェブサイトのこと. 例: Ameba ブログ, Yahoo ブログ等
SNS	ネットワーク上で参加者同士が文字による会話を同時に行えるようにしたサービス. 例: mixi, Facebook, LINE 等
動画共有サイト	インターネット上で動画等を共有するサービス. 例: Youtube, ニコニコ動画等
情報共有サイト	インターネット上で情報を共有するサービス. 例: Wikipedia, COOKPAD 等
マイクロブログ	短いテキスト(多くの場合 200 字以下)を不特定多数または特定のグループのみに展開するブログ形式のサービス. 例: Twitter 等
掲示板	電子的な掲示板サービス. 例: Yahoo 知恵袋, 2ちゃんねる等
ソーシャルゲーム	ユーザ同士で競い合ったり, 交流することのできるオンラインゲーム. 例: Gree, モバゲー

<sup>†</sup>一般教育科  
General Education

### 3. 若者の利用状況

#### 3.1. 日本全体の推移

平成24年通信利用動向調査[2][3]によると、10代のスマートフォン利用率が平成23年末の18.2%と平成24年末の52.9%を比べると約3倍近く上昇している。同じく20代のスマートフォンの利用率は平成23年末の44.9%と平成24年末の70.6%を比べると1.5倍近くになっている。ここ数年、10代・20代の若者の世代にスマートフォンを持つ割合が増えてきている。この利用動向の変化は若年層だけでなく、すべての年代層においても拡大している傾向にある。また、SNSの利用状況を比較すると20代における利用率も23年末より拡大しており全体の30%に達していることがデータから分かる。

他にも高校生を対象に行ったSNS利用調査の結果がZ-KAIから発表され[4]、高校生の70%がスマートフォンを所有していることが分かった。特に高校1年生の利用率が高く75%で学年が上がるにつれて下降傾向である。また、SNSの利用に関しては67%がLINEを使っており、23%がTwitterを利用していることもわかった(図1)。

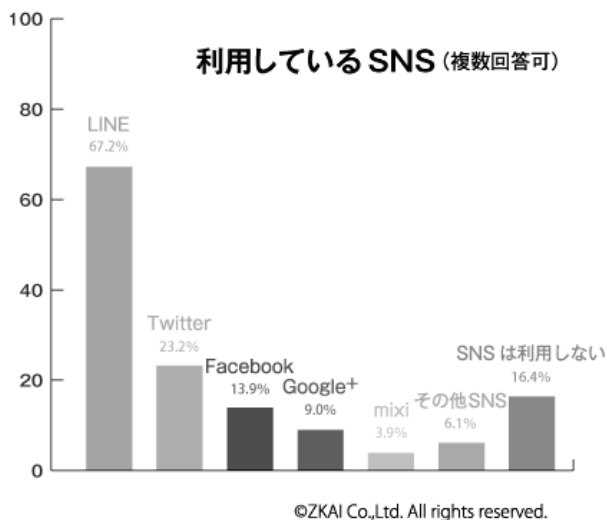


図1：高校生のSNS利用率

通信利用動向調査とZ-KAIのSNS利用調査のデータを比べて分かるように、近年で10代・20代のスマートフォン利用率増加に伴ってSNSの利用も増加し続けている傾向にあることが言える。

#### 3.2. サレジオ高専における推移

本学生の利用状況はどのようになっているだろうか。全学年の統計データはないが、1年時に開講される情報倫理の授業内で行われる「インターネットと情報倫理」に関するアンケート調査からSNSやTwitterの利用状況についてみていく。この調査は1学年時の年度初めと年度終わりに行っている。その中からSNSとTwitterの利用状況について抜粋して考える。

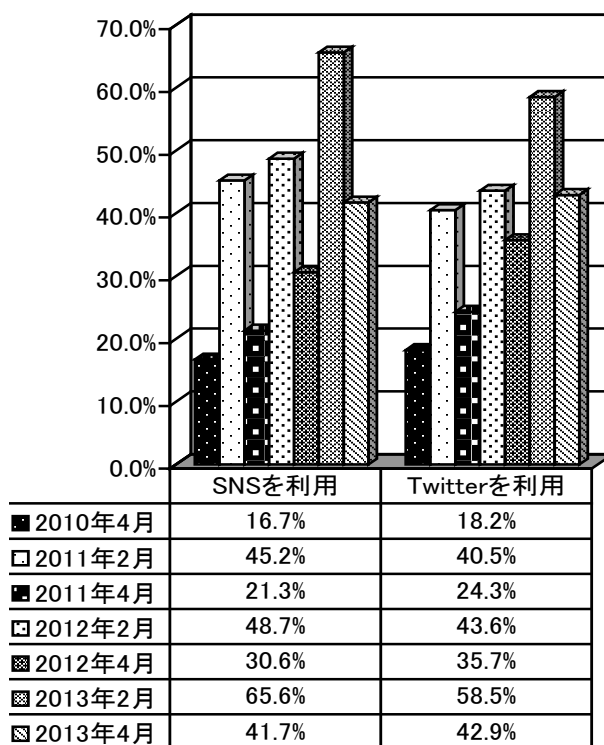


図2：サレジオ高専1年時における利用率

この結果(図2)から、年々SNSやTwitterといわれるソーシャルメディアを使う人の割合が急激に増加していることが読み取れる。その背景は「3.1 日本全体の推移」にあるようにスマートフォンの普及によるものだと考えられる。スマートフォンの普及によって今後、スマートフォンの利用者が増加するとともにSNSやTwitterの利用者も増加していくことが考えられる。

本学の利用率調査結果から、1年時の4月と1年時が終わる2月ではどの年度を見てもSNSでは2倍近く、Twitterでは1.5倍近くまで利用者が増加していることがわかる。いかにソーシャルメディアを利用

したやり取り・関わりが増えてきていることを示している。データの推移をみると年々、入学以前からソーシャルメディアを利用していることがわかる。このことから、ソーシャルメディアに関してのモラル教育・リテラシー教育を高専1年生(高校1年生)の段階よりも以前から始める必要があると同時に、高専1年生(高校1年生)から急激に使用が増加しているため、この段階においてもルールやマナーに関して、徹底して教育し促していくことが必要であると考えられる。

#### 4. 利用における問題と課題

これまでに SNS や Twitter といったソーシャルメディアを若者が利用している中、多くの問題が発生してきているのが現状である。問題が起こりうる環境はソーシャルメディア事件簿[5]や本当はコワイ SNS[6]が言っているように職場や学校、家庭、バイト先といったあらゆる場所においてである。近年、問題を起こしてしまうのは若者だけでなく、ソーシャルメディアを使うすべての人に当てはまるのである。ここでは、いくつかの例を基に問題点を整理していく。

##### 4.1. 問題事例

1 つ目は「ソーシャルメディアを仲間内の場と考えてしまっている」ことである。Twitter や Facebook を用いて内輪の話をしてしまっていることが最近では多々見受けられる。Twitter や Facebook といった SNS は使い方を間違えば一つ投稿してしまった情報が良いようにも悪いようにも使われてしまう恐れがある。例えば、ツイッターの事件として有名なのは、有名人カップルの来店をつぶやいてしまったことである。アルバイト従業員で働いていた女子大生がなかなか見られない有名人に出会い、感激のあまり Twitter に投稿してしまった。その投稿が見る見るうちにリツイートされたり、2ちゃんねるに投稿されたり、翌日にはツイッターの情報を元にツイートしたであろう人物の mixi アカウントが発見されるなど炎上炎上を重ねてしまった。その後、大学名や所属サークルまでもが割り出され、フェイスブックのアカ

ウントと勤務先の詳細、そしてついに本名と顔写真までもがネット上にさらされてしまった。急いでアカウントを削除したが時すでに遅く、事態は新聞やテレビで報道されるほどにまで深刻化してしまった。ホテル側は総支配人自らが謝罪し、その従業員は職場を解雇されたといわれている[5][6]。

2 つ目は「知らず知らずのうちに被害者にも加害者にもなりかねない」ことである。気軽に意見を発信することができるソーシャルメディアにおいて、日頃思っていることをついつい Twitter やブログ、Facebook といったメディアに投稿としているのをよく見かける。投稿する側として何とも思っていないことであっても、見る人によっては「なんでこんなことが載っているの」など、ちょっとしたことが問題になりかねない。例えば、SNS に何気なくその一日の出来事と一緒に写真などをアップした場合に起こった事例である。バーベキューに行っていたグループでお酒も入ってきたころ、居眠りをしてしまうメンバーがいた。そのメンバーの顔にいたずら描きをし、バーベキューに来なかったメンバーに伝えるために Twitter にアップした。そのアカウントは鍵付きであったため多くの人には知られなかった。しかし、その写真を見たフォロワーから「後輩のおもちゃになってバカみたい」と返信があった。そういった一連の経緯を知った、落書きをされたメンバーは腹を立て【名誉棄損だ!】【訴えてやる!!】という展開まで発展してしまったのである[6]。

2 つの事例からわかるように、SNS や Twitter といったソーシャルメディアには、まだまだ問題が山のようにあると言える。ソーシャルメディアに嫌がらせコメントを書かれノイローゼになったり、SNS や Twitter で知り合った相手と浮気し離婚に至ったり、親友と思っていた友達が SNS で関わっていくうちに表面的だったことに気づきショック状態になったり、SNS や Twitter などのソーシャルメディアを使っていないためいじめの対象になったりしている。最近では LINE はずしといった、仲間外れが行われている現状がある。このようにソーシャルメディアには、「目に見えない場所で多くの問題・悲しいことが起こっている」現状があるのだ。



## 4.2. ソーシャルメディア利用の心構え

では、どのような心構えが必要だろうか。今現在の使用方法を見ると、ソーシャルメディアの本来の使い方とは異なったものになっていると思われる。本来ソーシャルメディアは「利用者が情報を発信し、形成していくメディアのことで、**利用者同士のつながりを促進する**様々なしなかけが用意されており、互いの関係を視覚的に把握できるのが特徴である」[1]ことから、4.1のように問題の要因を起こしてしまっただけではならないと考えられる。では問題を起こさないようにするにはどうすればよいだろうか。ここではすべてに言及することはできないが一部について考えてみる[7]。

一つ目はソーシャルメディアに情報を無闇矢鱈に載せないことである。学校生活でよく耳にするのは「LINE にアップして」や「リツイートしてて」などである。アップする内容が自分自身のことであればいいものの、他人に関するものであればそれはやめさせなければならない。また、自分自身のIDなどを不特定多数の人が見ることができる友達検索掲示板、言わばID 掲示板といったサイトに載せてしまっている現状がある。ひっくり返って考えると自分自身で首を絞めているのである。

二つ目は一度公開した情報は完全に削除することができないことである。事例であったように、一度書き込んだデータがいつの間にかに拡散された場合もう取り返しのつかないことになる恐れがある。それは回収することも消すこともできない事態になるのである。また、多くの場所にデータが拡散されてしまえば永遠に語り伝えられる可能性もある。その情報が自分自身の問題だけで済めばいいが、他人の情報を流して拡散してしまえば取り返しのつかないことにもなりかねない。情報をソーシャルメディア上に共有するには非常に気を使わないといけないのである。

三つ目は情報に惑わされないことである。ソーシャルメディアは多くの人が使っている。その中には真実でない情報も隠されており、すべての情報が正しいわけでないことを意識して関わっていく必要が

ある。噂であったり想像したことであったり、憶測であったり、評判であったりと周りの風評に惑わされないようにしなければならない。惑わされないためには、すべての情報を本気に受け止めず冷静に行動するとともに、その情報の正当性などを考え、正しいと判断できる情報のみを用いていくことが大切なのではないだろうか。

## 5. おわりに

ソーシャルメディアの発展によって私たちの生活は豊かになったと言える。スマートフォンの普及によって「いつでもどこでもだれといても」情報を入力することが可能となった。それはある意味、人間が情報からの束縛を受けることにもなりかねない。そうならないためには特にソーシャルメディアの正しい使い方をしっかりと理解し、実践していくことが必要なのである。すべての人がソーシャルメディアを通して豊かな生活を送ることができる社会になることを期待している。

## 文 献

- [1] 総務省 情報通信国際戦略局 情報通信経済室, “ソーシャルメディアの利用実態に関する調査研究の請負 報告書”, 2010.
- [2] 総務省情報通信国際戦略局情報通信政策課情報通信経済室(2013)「平成24年通信利用動向調査 ポイント」  
[http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000230980.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000230980.pdf)  
(2013年9月14日確認)
- [3] 総務省情報通信国際戦略局情報通信政策課情報通信経済室(2013)「平成24年通信利用動向調査の結果 (概要)」  
[http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000230981.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000230981.pdf)  
(2013年9月14日確認)
- [4] Z-KAI, 「【SNS 利用調査】高校生の 67.2%が LINE, 23.2%が Twitter を利用。スマートフォン所有率は 69.5%。」  
[http://www.zkai.co.jp/home/news/20130912\\_sns\\_research.html](http://www.zkai.co.jp/home/news/20130912_sns_research.html)  
(2013年9月14日確認)
- [5] 小林直樹, “ソーシャルメディア炎上事件簿”, 日経BP社, 2011.
- [6] アスペクト文庫, “本当はコワイ SNS”, 株式会社アスペクト, 2012
- [7] “ソーシャルメディアポリシーに入れるべき 10 項目 (10 Must-Haves for Your Social Media Policy)”  
<http://mashable.com/2009/06/02/social-media-policy-musts/> (2013年10月1日参照)



## コラム

「情報処理」雑感

専攻科 大藤晃義

自作オーディオの楽しみ

一般教育 花山康雄

学生交流会に参加して感じた事

情報工学科 小出由起夫

【連載】図書館より（第3回） より身近な図書館をめざして

図書館 奥田恵美

【連載】図書館の本棚から（第3回）江戸近郊道しるべ

一般教育 山館 順

【連載】図書館の本棚から（第4回）ヴァイキングの歴史

一般教育 山館 順

【連載】「メディア」博物館探訪（第3回） 大阪企業家ミュージアム

一般教育 山館 順

【連載】「メディア」博物館探訪（第4回） 町田市民文学館ことばらんど

一般教育 山館 順



## 「情報処理」 雑感

専攻科 大藤 晃義

ある日、本センター報の担当者から「コラム」に「何か書いてください」と頼まれました。私は未だに本校のシステムを使いこなせず、その方に「本校の情報処理システムは敬老精神に欠ける」とクレームを付けると、「それでは本校のシステムは嫌いだ」と書いてくださいと言われ逃げるに逃げられなくなって、とうとう引き受けざるを得なくなりました。

私が30歳の頃ようやく「情報処理」という科目名で大学等で教育が始まりました。私の情報処理音痴を知っている皆さんに言っても信用してもらえないと思いますが、私が木更津高専に赴任したときに「歳が一番若い」と言う理由で「情報処理」という科目を持たされました。

木更津高専の前は山梨大学で「数値計算法」(だったかな?)という科目の演習を「フォートラン」言語で行っていましたが、木更津高専ではなんと「アセンブラ」(機械語)をやれとのこと!ビックリしました。全くアセンブラ言語は知りませんし、それからが大変でした。何しろコンピューターは日立ハイタク10という「ただの箱」でイニシャル・プログラム・ローダーからテープで読み取らせ、16進法でキーを操作して、テープ・リーダーでプログラムを読ませるといふ、今では考えられない時代です。何とか授業をこなしていると、今度はALS240(だったかな?)と接続してハイブリッドで、紐で吊された球の運動を解析する研究にかり出されるといった経験もしました。従って、その頃は情報処理の最先端?をいていたわけで、東大の計算機センターにも時々通い、構造物の有限要素法による応力解析も行っていました。

その内に、若い情報処理を得意とする先生が採用されるようになり、直接、私がコンピューターに触れなくても良い環境になったこともあり、一時ご無沙汰をしていました。

その間のコンピューターの進歩はめざましく、気が付いたときにはすっかり取り残されていました。

計算は自分でプログラムを作り結果を求めるものと思っている間に、いつの間にか、いかに他人の作ったプログラムを利用して効率よく計算するかの時代に移っていました。私がパソコン処理について行けなくなったのは、そう、あれはパソコンの廻りで「ネズミ」がチョロチョロし始めたときからです。

そんな私ですから、サレジオ高専にきて驚いたのは全ての学内の処理が学内LANの中で処理され、全ての教職員が、わけなく取り扱っていたことでした。

「何々の文書をどこどこにしまってありますので、そこに自分の処理を行い、そこにセーブしておいてください」などの伝達を聞くと私は「?」。NHK連続ドラマの「海女ちゃん」ではあるまいし、そんなに深く潜って仕事をして無事生還するなんて、「木の金槌」の私にはとうてい出来ません。

そこで、追い詰められて私が何か仕事をしなければならなくなると、私の仕事がかまくら行かないだけなら問題無いのですが、他の方のジョブを壊してしまったりするのが心配で、最後はセンター担当のWさんや教務担当のKさんに「SOS」を出す羽目になってしまいます。

そのような私ですが皆さんの親切に甘えながら何とかやってきました(?)。これからも関係する方にはご迷惑をお掛けすると思いますが、よろしく願いいたします。



## 自作オーディオの楽しみ

一般教育 花山 康雄

バブルになる前の時代にはオーディオが流行っていた。巷にはオーディオ関係の雑誌がたくさん発行され、お金のある人も、お金のない人もできるだけ（買える範囲内だが）高性能なステレオ装置を買って音楽を聴いていた。私もそのような時代に思春期を迎え、兄が高価なステレオ装置を買ったのを期にオーディオに関心を持つようになった。

しかし、当然のことながらお金はないので、ただ雑誌を見てはため息をついていた。そんな時、友人がステレオアンプを自作しているのを知り、もしかしたら自分にも作れるのではないかと、アンプの製作記事の載っている本を購入して読んでみた。すると、電気の知識がなくても指定された素子を買ってきて、指定された通りにはんだ付けをすれば、ちゃんとステレオアンプができるらしいことがわかった。もちろん簡単にできると思ったのは大きな間違いではあるが、とにかく作ろうとの気持ちが芽生えたのは事実である。いろいろ本を読んだり、友人と話をしているうちに、私の頭の中では、メーカー製のアンプよりもはるかに高性能のアンプができると信じるようになっていった。私をそんな気持ちにしてしまったのは金田式 DC アンプを世に広めた金田明彦氏である。この時代でトランジスタ式のステレオアンプを自作しているマニアで知らない者はないほど有名な人である。その文章は論文のような難解なものではなく、誰でも高性能なアンプを自作できると信じさせる説得力に満ちあふれていた。

実をいうと、私は高校までは電気に関する勉強は苦手であった。なにしろ電球、モーター、ラジオやテレビなどを魔法みたいに感じていたし、電流、電圧などはテスターを使わない限り目に見えない現象なのでどうしても親しみが持てなかったのである。当然、大学も化学科を選び、とてもアンプを製作するようになるとは全然思わなかったのである。そんな私をアンプ製作に向かわせたのであるから金田氏は相当なものである。とりあえず、詳しい友人に秋葉原まで連れて行ってもらってトランジスタやコンデンサ、抵抗などを買った。友人は何故か秋葉原に詳しくて、暗くて汚い小さな店が密集しているところで、いろいろな部品を勧めてくれた。繰り返すが私は電気が嫌いだった人間である。電気の基礎知識はゼロに近かったので、ケミコンのように極性があるコンデンサなど知らなかった。

買ってきた部品をユニバーサル基盤にのせてはんだ付けを始めた。長い時間がかかったが何とか完成して電気を流した。とても緊張した。火が出て火事になるのではと思ったのである。しかし、何事もなく動作した。感動した。しかし、しばらくすると電源トランスと電源用ケミコンが熱くなってきた。次の日、友人にアンプが動作したことと、電源トランスやケミコンが発熱したことを報告した。友人は「！」絶句して

いた。私の作ったアンプでは電源トランスが発熱して熱くなるはずはないとのことであった。後で調べてもらったら、ケミコンには極性があり、私は+と-を逆に接続していたのである。友人は厳かに、電源トランスとケミコンが焼けてしまったので捨てるようにと宣告したのである。あーあ。



図1 V-FET アンプ

しかし、この失敗が逆に製作意欲に火をつけたようである。相変わらず電気の知識はゼロに近いが、スピーカーを壊さないで音を出せるアンプを作れるようになり、兄が完成できなかった真空管式アンプも修理して、しばらく田舎のステレオスピーカーを鳴らしていた。ただ、自分の作ったアンプを使って音を聞いてみると、



図2 アンプの基盤類

残念ながら最高の音質であるとは思えなかった。何とか最高の音質になるように製作記事を見てはコピーし改良を重ねていった。あるとき、ヘッドホンアンプを完成させて、学校の測定装置で性能がどうなのかを調べてもらった。すると、何も入力されていないのに1MHzの正弦波が出力されていた。そう、発振していたのである。その波形を見た先生が「きれいな波形だね。とても良い発振器だよ。」と私には残酷すぎることを言ったのを忘れることが出来ない。その後、いろいろと手を加えて発振を止め、歪率を測ってもらった。結果は優秀だった。ほっとした。

金がないと言っていながら、結果的にはオーディオアンプ製作にずいぶんお金を使ってしまった。しかしお金がかかった分、高性能アンプを作っているという夢をずいぶん見させてもらった。ちょうど、宝くじを買って発表されるまでは、当たった時の夢を見られるのと同じである。高校生までは家族の中で何もできない不器用な人間であったが、オーディオアンプをはじめとしていろいろなものを製作、修理するようになったおかげで「なせば成る」という気持ちが芽生え、自信がついたのは大きな成果だったと思っている。これからも、いろいろなことにチャレンジして楽しみ（苦しみも？）を増やしていきたいと思っている。



## 学生交流会に参加して感じた事

情報工学科 小出 由起夫

私は現在、情報研究部の顧問を担当している。部員は例年 20 名から 30 名程度だが、今年は多くの 1 年生の入部があり、部員数は 60 名に達している。情報研究部では、プログラミング班（ゲームプログラムを作成する）、2D・3D 班（画像ソフトを利用して 2D・3D の静止画を作成する）、音班（音楽ソフトを利用して曲作り）、ムービー班（画像ソフトを利用して動画作り）に分かれて活動している。

各グループとも PC を利用しなければならず、活動場所は基本的に部室となる。しかし、部室には利用できる PC は 8 台程度しか設置されておらず、10 人も学生が集まれば部室はいっぱいになってしまう。現在、部員の多くは自分のノート PC を持参し、食堂に集まって活動している。各グループともメンバーが全員集まって活動することは困難であり、グループ間の交流をはかることもままならない状況となっている。部員間の連絡は部室に掲示板を設け、掲示板に必要事項を記載して連絡を取ることにしているが、部員は毎日部室に顔を出すわけではないので、連絡事項を部員に徹底させることは難しい。掲示板以外にメーリングリストを作成し、緊急事項はメールで配信することになっているが、メールをきちんと見る習慣のついていない部員もいて、状況の改善はできていない。放課後部室に顔を出すこと、メールは毎日チェックすることを指導しているが、大所帯になっていろいろな問題が起きてくる。頭の痛いことである。

5 月に入ってから部会を開き、今年度の活動方針を説明し、個人目標の設定をさせた。運動部のように試合をして日頃の鍛錬の成果を確認するということはできないので、定期的に品評会を行って普段の活動の成果を発表している。品評会といっても部内でおこなっているもので部外に公開はしていない。発表会の開催は 6 月、夏期合宿（8 月）、育英祭、年度末（2 月）の計 4 回実施している。

発表会では出席した部員達の前で創作した作品を見せ、プレゼンを行う。作品の出来具合について主に上級生からいろいろアドバイスが行われる。先輩の経験に基づいた指導を受ける絶好の機会となっている。時には下級生の中から優れた作品が展示されることもあり、先輩が感心するケースもある。発表会は各部員の活動成果、技術レベル、成長度合いを知る良い場である。

プログラム班はグループで集まってプログラミングの講習会をしているので比較的学年間での交流がはかれている。静止画や動画、音班は仲の良い学生（同学年か 1 年の差）間で活動することが多く、2 つ以上年が離れた学生間での交流は少ない。多くの部員間で啓蒙し合う機会が持てないことが悩みの種である。

ここで気になる事は、発表会が年間 4 回しかないことで部員間の交流が密にできないこと、

部員たちの発表の仕方に工夫が足りないことである。各部員に共通して言えることは、創作の意図や技術的に苦労した点などの説明が十分でないこと、下級生は上級生にアドバイスをもらう姿勢が足りないことである。この点をハッキリ意識させられたのが8月29日から31日にかけて行われた「学生交流会」である。交流会は関信越地区の高専が参加しており、各校の文化系クラブの学生が集まって日頃の活動成果を発表し、交流する場である。学生交流会は、幹事校の有志の学生（学生会）が中心となって運営されている。今年は長岡高専が幹事校となり新潟県長岡市で開催された。本校からは情報研究部とモダンダンス部から選抜された学生たちが参加した。

情報研究部からは当初20名の参加を希望していたが、補助してもらえる予算の関係から9名に絞って参加することになった。各グループから4年生を中心に2年と1年の中から将来中心となって活躍してくれそうな学生を選抜した。29日は会場の準備、30日と31日の昼過ぎまでが発表と交流の時間である。発表の時間帯には地元の一般客も自由に見学できるようになっていた。会場は市役所を中心に体育館・会議場・各種展示スペースが一体化された設計になっていた。コンピュータを扱うクラブの発表場所は企業や町の人たちが使用できる会議室等がある建物の2階部分に設置されていた。我がクラブのブースには隣のブースとの区切るとなるパーティションと机・椅子が置かれていた。さて、気になる発表風景であるが・・・

2D・3D班は展示用に学校でカラー印刷してきた絵（A4版）をパーティションに見やすいように貼り付けた。音班はブースの端で周囲の邪魔にならないよう持参したコンピュータにて作曲した曲をエンドレスで再生できるようにした。当の学生たちは、パーティションの前に机と椅子を並べ、持参したノートPCを用いてもっぱら絵を描く（デモンストレーションなのか？）作業に従事していた。発表の時間となり見学者がブースを訪れても、作品の説明をするでもなくPCの前から動く気配はなかった。来訪者はざっとパーティションに貼られた絵を眺め通り過ぎていく。悲しいかな、これが情報研究部の発表風景である。普段の品評会の様子そのままであり、見せよう、見ていただくという姿勢が不十分であった。2日目は席に座りっぱなしでなく、交代で会場全体を見学してくるよう部員たちに指示を出した。よそのクラブの発表の様子や方法を見学し、場合によっては質問をして自分たちと比べてほしいからである。このような会に初めて参加したのだからと幾分大目にみても、残念な結果であることに変わりはなく、顧問として反省する点を多々思い知らされた発表会であった。

今回の発表会での経験は学生にとっても顧問にとっても、良き反省材料を与えてくれた。31日学校について解散する前に、参加した学生たちに今回の教訓を糧として、育英祭ではどのような発表を行うのが良いか各自で考えて案を練り、次の部会で皆に報告するよう指示した。育英祭ではこの経験を元に昨年よりも充実した展示ができるよう期待するとともに指導していきたい。

部員のモチベーションを高め維持すること、部員の成長記録を残すこと、作品をジャンル別に保存すること、部員が個々に高めた技術を紹介し、後輩たちに継承させること、見せるための知識や技術を習得させることなど顧問として取り組まねばならないことが幾つもある。これらをホームページを活用して行うことができないか検討している。その際にはメディアセンターに相談しながら実現していきたいと考えている次第である。





## 【連載】図書館より（第3回）

### より身近な図書館をめざして

図書館 奥田 恵美

サレジオ高専図書館は正面入口から近く、南側は全面ガラス張りで、学校の中でも良い場所にあります。この環境に恵まれた図書館をより多くの学生に利用して欲しいと願い、普段どのように学生と関わっているか、またどのような図書館運営の工夫をしているかをお話します。

コミュニケーションの第一歩は挨拶です。私の座っているカウンター受付は図書館入口に位置しているため、入ってきた学生には「おはようございます」「こんにちは」と、できる限り挨拶をします。挨拶を始めた頃は「お店みたい」との声も聞こえてきました。しかし今では習慣となって、学生から先に挨拶してくれるようになりました。当初恥ずかしさで戸惑っていた学生も、いつの頃からか自然体の挨拶を返してくれるようになっているのです。

貸出の際も「読みたい図書があればリクエストしてね」と声かけをします。教員の場合は、雑談の中で授業の参考にした資料を聞いています。積極的に聞くことでユーザーの求める資料がわかります。それらを選書の参考にし、資料の利用増加につながればと考えています。

資料探しに手間取っている学生にも、さりげなく声かけをします。また選択授業の空き時間などを図書館で過ごす学生もおり、休み時間終了間際までいる学生には、次の授業に遅れないように確認の声かけもしています。

図書館の奥は情報館（PC ルーム）で、授業での利用がない時や休み時間は個人に開放されています。特に昼休み、放課後は満席になることもあります。そこで情報館を利用する学生の目に留まるように、入口正面に「今話題の新着本コーナー」を、情報館への通路には学科別の新着本コーナーを設置しています。さらに手に取って読みやすいように、雑誌およびライトノベルのコーナーも設置しています。特に「今話題の新着本コーナー」は入口ドアを開けると一番に目につくせいか、良く貸出されています。

またコピー機を利用する学生の目につくように、その付近にも新着本やテーマごとのコーナーを設置しています。テーマは「研修旅行特集」など、その時々为学校行事などに合わせたタイムリーなテーマを選びます。さらに雑誌コーナーに隣接してソファを置きました。最近ではこのソファで、リラックスして図書や雑誌を読む学生の姿が見受けられるようになりました。

これまで5冊だった1回の貸出冊数も、今年度から10冊になりました。また禁止だった館内での飲食はペットボトルの飲み物であれば持ち込んでも良いことにしました。こうして学生がより利用しやすい環境を整えています。

以上のように私立高専ならではのきめ細やかなサービスの提供と、学生と普段からコミュニケーションをとり同じ目線で考えることで、利用しやすく居心地の良い図書館をめざしています。



## 【連載】図書館の本棚から（第3回）

### 江戸近郊道しるべ

村尾嘉陵著 平凡社東洋文庫448 1985年

一般教育 山館 順

開国前夜の江戸、文政から天保にかけて御家人武士の村尾嘉陵老人が健康のために江戸近郊に日帰りから一泊の小さな旅を試みたその記録である。彼は頗る健脚、旅先の情景や歴史名勝のみならず往還の衣食、宴席まで活写、やがて終わらんとする太平の世の世相を伝える。紀行文中より本校にも比較的近い甲州街道の高幡不動尊（日野市）の描写を拾ってみよう。

天保四年（1833）秋霜の夜明け前友人と共に九段の屋敷を出た嘉陵は西に向かう。昼時には府中の宿場に到着、茶屋では「あるじの姥、大根、ニンジン、やきどうふなど、あはせ煮たるを器に盛て」麦飯、持参の塩鮭で食事、「腹事にすきたれば、むまき事いふべくもなし」。老人食欲旺盛、持参のひさごはすでに干しており、府中で買い足す。質素だが何とも旨そうな菜の描写である。

今も鎮座する大国魂神社参拝ののち百草園の名勝をみて、晩秋の日暮れ時ようやく目的の高幡不動尊に至る。

寺僧の案内で平安末の本尊不動明王に参拝、「難有心地す」、背後に今もそびえる愛宕山等山内には紅葉が見ごろを迎えていた。

「かなたこなたを見はて坊に帰れば、寺内に火（＝灯）を点ず」。秋の宵、寺坊にともる灯が澄んだ大気に鮮やかに映ったことだろう。

寺僧は「一杯をすゝめてのち飯を出す、江戸にもなき物など貯え置、饗膳いとまめやか也」。

また「各湯あみして、路次のつかれを忘れて」、晩には寺の関係者も交えた愉しい宴となった。

明け方に嘉陵が目覚めると月が冴えわたり、「多磨川の水の音間近く聞へ、心を澄し、耳を洗う」、まだ暁の闇に閉ざされた山内にはフクロウの声が「ものすごし」。草深い武蔵野の山里である。

健康に気を遣い、歴史と名勝を訪ねる遠足、太平の世の簡素で心豊かな暮らしがしのばれ、元気でゆったりとした年配者の愉しみの記事に読者は引き込まれていく。

しかしこの直後時代は変転していった。すでにこの年天保の飢饉が始まっており、幕府の勢威は次第に揺らいでいった。二年後の天保六年すぐ近くの石田村に生まれた富裕な農家の子である土方歳三が新撰組副長となり京都で活躍したことは余りに名高い。高幡不動は歳三が祈願した寺でもあった。

現在高幡不動尊境内には土方歳三の像が立ち、周辺は新撰組関連の観光スポットとなっていて、剣に生きた幕末の武装集団のイメージが前面にでていますが、それに先立つほんの数年前には嘉陵が記したような風雅の土地であったことが何とも奇妙に思われる。

嘉陵老人が没したのは紀行の八年後天保十二年、享年八十二というのは当時としても長命であり、明治二年函館五稜郭において戦死した土方歳三の三十四と比較しても際立っている。

太平と乱世不達の時代を比べながら境内を散策するのによい手引きである。

書誌ID： 0000034734

請求番号： 291.3/M





## 【連載】図書館の本棚から (第4回)

### ヴァイキングの歴史 (原書名:A history of the Vikings)

Gwyn Jones 著 笹田公明訳 恒文社 1987年

一般教育 山館 順

どのような歴史的存在も同様だがバイキングほど相反するイメージに彩られたものも珍しい。時に暴虐な侵略者、または遠洋航海の植民の民、さらにはヨーロッパをはるかに超えて海を旅する自由な商人、本書はイギリス人歴史家が研究水準を踏まえその実際の姿を碑文史料、イスラム側の史書、神話伝説、考古学遺物と遺跡を手がかりとして描いた概説書である。

8世紀末イギリス東岸を襲撃した彼らの一団は破壊と略奪を重ね、奴隷貿易のために農民を連れ去った。以後西欧を支配していたカロリング朝の安定は秩序の混乱へと変じ、社会の動揺が広がる。9世紀には吃水が浅く竜頭をあしらったバイキング船でヨーロッパの内陸河川を縦横に遡行、パリを襲い、遠く毛皮を求めロシアに至るとノヴゴロド、キエフの両公国を建てた。

彼らの北欧多神教の異教世界では、死者もまた生者に対する復讐のためよみがえった。キリスト教化の最も遅れたスウェーデンでは11世紀ウプサラにあったバイキングの神殿に空気をつかさどるトール神を中央、左右にそれぞれ軍神オーディンと平和神フレイの像が安置された。9年毎の大祭では像に神酒が注がれ、九つの首を奉じたという。さらに神殿隣りの木立に動物と人間の身体を併せて72体を生贄に吊るした。宣教師による史料の凄惨な記述がある反面、ドイツ北端ヘデビュー遺跡ではキリスト教の墓と異教のそれとが混在しており、共生もみられた。

ヘデビューはバイキング交易の基地であり、彼らの使用した銀貨ははるかな中央アジアサマルカンド周辺で産出され、イスラム商人を経由して西欧にもたらされたものであった。本書では当時の衣食住にわたる詳細な記事と男女を問わず化粧するバイキングたち、彼らの歌う「喉から唸り出てくるようであり、犬が吠えるようであり、ただただ野獣のよう」な唄に触れる。

バイキングの海外遠征は突然終わる。徐々に進んでいたキリスト教化は支配層も含めた彼らの心をとらえ、10世紀には西欧側も対抗策を固め、遠方の都に居る王権ではなく近在の中小領主である騎士層への権力集中が始まる。封建社会の確立である。

封建制確立によって備えを固めた西欧に対し、数において少数だったバイキングはやがて飲み込まれ埋没していった。バイキング王ロロの移住と改宗で開かれた北仏のノルマンディ公国は数世代ののちにはフランス王の下で大貴族となり、地元に着した。

1066年スタンフォードブリッジの戦いで敗死したノルウェーのハラルド王を最後に彼らの組織的な遠征は終焉する。

バイキングを駆り立てた外の世界への衝動は何だったのか？故郷スカンジナビアにおける慢性的な人口過剰と耕地不足とされるものの結局のところ定め難いのだが、本書からは彼らの熱気が伝わってくる。自分が十年ほど前の晩夏に訪れたヘデビュー遺跡で出土したバイキング船遺構を前に感じた感興が本書を読むと思いだされる。

書誌ID : 000039800

請求番号 : 238.9/J





## 【連載】「メディア」博物館探訪（第3回）

### 大阪企業家ミュージアム

一般教育 山館 順

今回は少し目先を変えて新聞メディアと大阪という視点から「大阪企業家ミュージアム」を紹介したい。メディアそのものを主対象とした博物館ではないが、シャープ、松下等我々にもなじみの関西系企業と実業家を紹介する博物館の中に「中新聞の形成」と題した関連コーナーがある。

場所は繊維問屋で知られた船場の一郭、大阪産業創造館の高層ビルの地階である。大阪と新聞、というと一寸意外かもしれないが、読売以外の朝日、毎日、産経はこの地で成長し、大正末から昭和にかけて東京に進出、全国紙に発展した経緯をもつ。三紙共通点としてはそれまで明治前半の自由民権運動期に政論中心の「大新聞＝おおしんぶん」と社会、時事中心の「小新聞＝こしんぶん」に分かれていた新聞を日本の産業革命の進展を背景に激増した中流層の識字教育普及に伴って広く大衆社会に受け入れられる「中新聞」という形にまとめた事がある。

その方針は不偏不党、文化教養主義、速報性などであり、高速輪転機による大量印刷がこれを技術的に可能にした。情報それ自体が商品価値を持ち始めた時代の到来であり、事業の基本的な性格は今も変わらない。現在我々が目にする新聞社のイメージは大阪生まれとって差し支えない。

三紙のうち朝日の経営者村山竜平（1850-1933）は明治中期に支局網の充実、東京から電信による明治憲法の速報、作家夏目漱石の起用による連載小説で人気を呼び、文化事業の拠点として講演会、演奏会場である朝日会館を建設した。新聞社主催のカルチャースクールの原型であり、先見性に驚かされる。

毎日の経営者本山彦一（1853-1932）はスクープ記事としてロシア革命後のレーニンに世界初のインタビューを実施、各種イベントと紙面記事とのコラボで部数を伸ばした。

さらに産経の前田久吉（1893-1986）は住民第一主義を掲げ、ラジオ欄の充実、博覧会との協賛で知られる。戦後間もない昭和二十七年にはモダンな新社屋を建設、まだ珍しかった取材ヘリを飛ばした。作家司馬遼太郎が社会部記者だったのは有名な話だが、彼を生んだモダンで合理的な大阪文化の背景はこうした風土だったのであろう。

現在も春夏の甲子園大会がそれぞれ毎日朝日の協賛であるなど大衆ジャーナリズムは大阪の町で生まれ国内全体にひろがった。

アイディアに満ちた多角経営による営利企業としての大衆新聞は世論形成の面で近代日本社会に重要な役割を担ってきた。

曲がり角といわれながらもその中庸の立場が世の中の安定に寄与したことは自明である。ニュースを政治の中心地東京ではなく大阪から眺めてみる事で一定の距離感が生まれ、ある種客観性を帯びることにもなるのであろう。メディアを考える上で参考になる。



## 【連載】「メディア」博物館探訪（第4回）

### 町田市民文学館ことばらんど

一般教育 山館 順

ベストセラー書籍もまたメディアにおいて不可欠の要素だが、作品の世界から地元を見直すところのように映るだろうか？

本校所在地である町田市は東京都西南部にあり、神奈川県に張り出した位置にある。北部には里山、南部は相模平野が広がり、古来江戸東京や横浜との往来が盛んであるため二つの文化との関係が深く、一方で繁華な商業地区と農村地帯が混在するため、二つの中心地との間に独特の距離感を保ち続けてきた。

この街にはまた都心とのアクセスの良さや緑と自然をもとめて多くの作家が住み続けてきたが、彼らの作品と町田の風土との関係を市民に紹介しながら、住民による文学活動の拠点にしようというのが市民文学館ことばらんどである。特別展のみの展示であり、2013年には10月19日～12月23日に「赤川次郎展」が開催される。

文学館一階の壁面には地元で暮らした作家たちのパネル展示があり、そこからひろってみよう。

「私どもが鶴川に住んで三十六七年になる。現在は町田市に編入され、大きな団地などが建っているが、当時は南多摩のささやかな寒村にすぎなかった。(略)この辺りは多摩丘陵の一部なので、山や谷が多く、雑木林では炭を焼き、山あいには田圃がひらけて、秋には柿と栗がたくさん取れる。買い出しに行くと、夕方おそく田圃道を歩いていると、蛍が顔にぶつかるほど飛んでいて、草葉にすだく虫の音がまびすしい。こんなところに住んだらさぞかし命が伸びるだろうとそのたびごとくうらやましく思った。」(白洲正子『鶴川日記』より)昭和十年代の東京近郊農村の情景が活写されている。

「朝食すませば庭に出でて、一冊の本を抱え樹木の下に腰をおろし、風の頁をめくるにまかせて、拾い読みし、居眠りなどすればはや昼なり。昼飯をくいたる後、欠かさず昼寝をなすは山人(遠藤のこと)の習慣なり、目覚めれば西日の庵下の谿にあかあかと差す」(遠藤周作『狐狸庵閑話』)

白洲ほど優雅ではないが作家遠藤周作も昭和四十年代の玉川学園周辺を喧騒に疲れた都会と隔絶した一種の隠れ里、理想郷の趣きで描いている。現在でもこの風景はほぼ変わらずに持続しているといえる。二十三区と比べて冬の寒さは厳しいが、秋には現在も小田急線沿いの枯田に稲穂の架かる光景が広がる。

他に近郊都市はいくらかもある中で町田には都市生活者に何等かの慰藉を与える風土があったのだろう。風土の持つ奇妙な魅力が作家たちを引き寄せ、やがてこの地で彼らが生んだ作品が読者の共感と需要を喚起してベストセラーを生んでいった。

平成の長期不況下、21世紀初頭のこの町を舞台にした三浦しをんの作品群においても町田の持つコードとしてそうした役割が読み取れる。都会で蹉跎を経験し、再生を希求する登場人物たちにとって町はもう一度広い世界に出ていくまでの暖かな一夜の宿りであろうことが想像できる。しかしやはりいつかは彼らがこの町を去る日が来るのだろう。矛盾した言い方だが一時の通過点だからこそ、街はその姿を長く人の心に刻むのかもしれない。



## 資料編

### 各種データ

#### [1] 図書館・情報館関連

- (1) 入館者数
- (2) 図書館蔵書冊数
- (3) 図書貸出冊数
  - (a) 分野別貸出冊数
  - (b) 月別貸出冊数
- (4) PC 教室利用状況

#### [2] WEB 関連

- (1) 年間来訪者数
- (2) 年間来訪者数(1日単位での集計)
- (3) サイト内年間ページ別訪問数(セッション数)ランキング
- (4) サイト内年間ページ別訪問数(セッション数)ランキングーTopicsのみ
- (5) メインサイト更新件数
- (6) 検索キーワードからの訪問数(セッション数)ランキング

## 1. 各種データ

### [1] 図書館・情報館関連

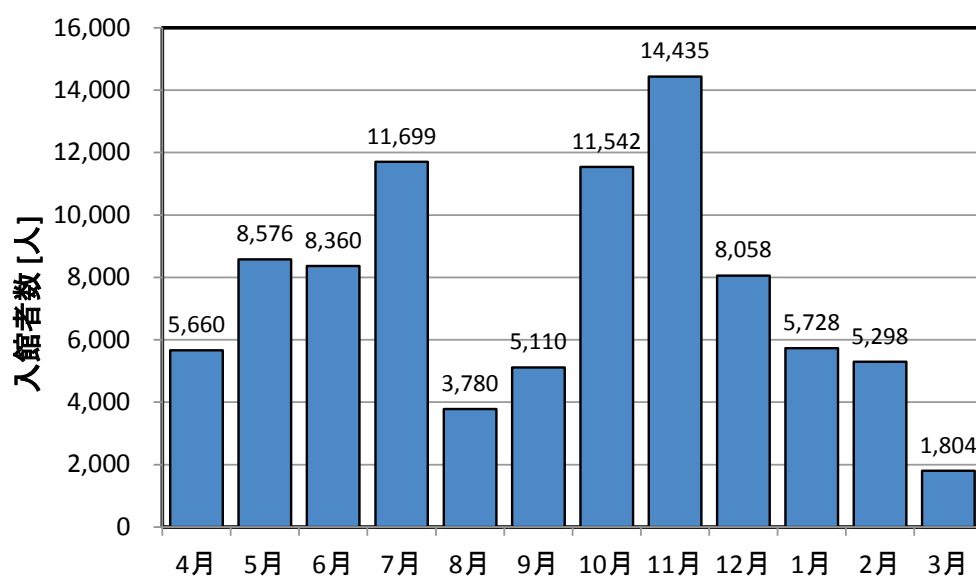
#### (1) 入館者数

2012 年度開館日数 233 日

2012 年度入館者総数 90,047 人

月	入館者数 [人]
4月	5,660
5月	8,576
6月	8,360
7月	11,699
8月	3,780
9月	5,110
10月	11,542
11月	14,435
12月	8,058
1月	5,728
2月	5,298
3月	1,804
計	90,047

月別メディアセンター入館者数



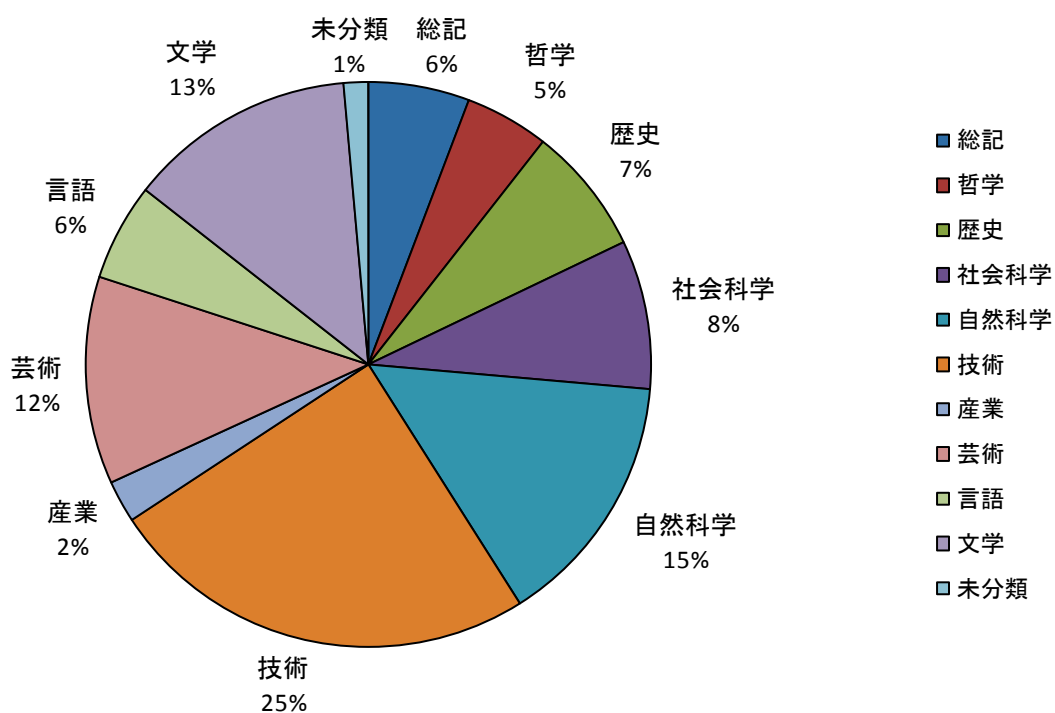


(2) 図書館蔵書冊数

2012年度 蔵書冊数

分野	蔵書冊数 [冊]	百分率[%]
総記	2,538	5.8
哲学	2,108	4.8
歴史	3,210	7.3
社会科学	3,738	8.5
自然科学	6,415	14.6
技術	10,865	24.7
産業	1,055	2.4
芸術	5,215	11.9
言語	2,446	5.6
文学	5,714	13.0
未分類	615	1.4
合計	43,919	100.0

分野別蔵書冊数

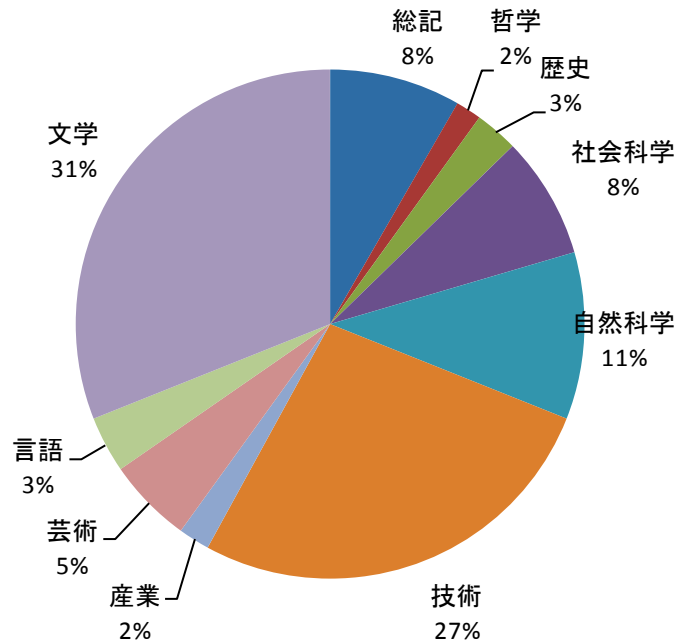


(3) 図書貸出冊数

(a) 分野別貸出冊数

2012年度

分野	貸出冊数 [冊]	百分率[%]
総記	357	8.3
哲学	70	1.6
歴史	117	2.7
社会科学	332	7.7
自然科学	454	10.6
技術	1,154	26.9
産業	85	2.0
芸術	231	5.4
言語	154	3.6
文学	1,330	31.0
合計	4,284	100.0



(b) 月別貸出冊数

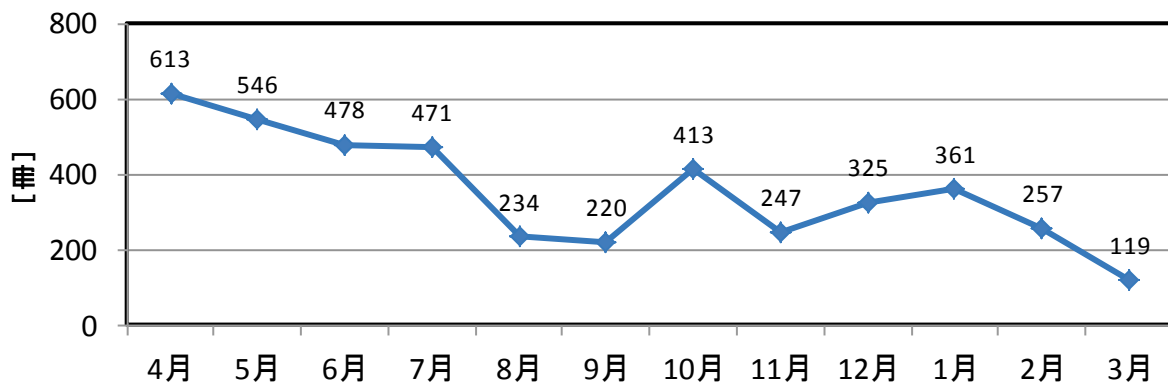
2012年度

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
冊数	613	546	478	471	234	220	413	247	325	361	257	119

※貸出総冊数 4,284 冊

内訳

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学生	519	475	381	374	196	183	345	196	288	309	216	81
専攻科	64	38	52	52	10	12	13	14	7	7	12	3
教職員	30	33	45	45	28	25	55	37	30	45	29	35
合計	613	546	478	471	234	220	413	247	325	361	257	119



## (4) PC 教室利用状況

## PC教室 (123 室) 利用状況

曜日	時間	クラス	科目	担当教員	備考
月	3～4限目	1 D	情報倫理	米山	
火	1～2限目	1 B	情報倫理	米山	
火	3～4限目	2 AD	情報処理	菅原	
火	5～6限目	3 ME	アルゴリズム理論	米山	
火	7～8限目	4 CS	数値計算 I	島川	前期のみ
水	3～4限目	4・5年選	We bプログラミング	小出	
水	5～8限目	3 CS	情報工学実験IV	島川・石川・小泉	後期のみ
木	1～2限目	3 CS	計算機概論 II	内田	後期のみ
木	3～4限目	4 CS	技術文書作成	山野辺	前期のみ
木	3～4限目	4 CS	データベースシステム	大島	後期のみ
木	5～6限目	4 AD	自然科学概論	山本孝・花山	
金	1～2限目	1 A	情報倫理	米山	
金	3～4限目	1 C	情報倫理	米山	
金	5～6限目	5 CS	統計解析学 I	佐藤豊	前期のみ
金	5～6限目	5 CS	統計解析学 II	佐藤豊	後期のみ

ノートPC利用状況

2012年度 前期

曜日		1～2 校時目	3～4 校時目		5～6 校時目	7～8 校時目
月曜日	クラス					
	授業名					
火曜日	クラス		5CS		5AD	
	授業名		DTP・組版 杉本		デザイン マネージメント 島津	
水曜日	クラス	3ME	4/5 年		3ME	
	授業名	創造演習 森/米盛	映像メディア概論(選択) 杉本		機械電子工学実験 平岡/吉野/米盛/稲毛	
木曜日	クラス				5CS	
	授業名				マーケティング論 氏家	
金曜日	クラス		4AD	4CS		
	授業名		プレゼン テーション 谷上/西野	プログラ ミング応用I 清水/伊原		

2012年度 後期

曜日		1～2 校時目	3～4 校時目		5～6 校時目	7～8 校時目
月曜日	クラス					
	授業名					
火曜日	クラス	2CS			5AD	
	授業名	プログラミング基礎Ⅲ 小出/宇津木			デザイン マネージメント 島津	
水曜日	クラス	3ME	4/5 年		3ME	
	授業名	創造演習 森/米盛	映像メディア概論(選択) 杉本		機械電子工学実験 平岡/吉野/米盛/稲毛	
木曜日	クラス		4EE		5CS	
	授業名		メカトロニクス 斉藤純		人工知能Ⅱ 大島	
金曜日	クラス		4AD	3CS		
	授業名		プレゼン テーション 谷上/西野	デジタル 回路設計 内田		

## [3] WEB系

## (1) 年間来訪者数

年月	ユーザ数		400 ユーザ以上の来訪を記録した日	備考
	リニューアル前	リニューアル後		
2012年4月	7,018		なし	
2012年5月	3,657	1,239	なし	5/17 リニューアル
2012年6月		6,718	20 水(445), 22 金(560)	20日は台風
2012年7月		6,541	なし	
2012年8月		6,927	なし	
2012年9月		6,855	18 火(426)	
2012年10月		7,715	1 月(444), 12 金(418)	
2012年11月		7,223	2 金(526), 3 土(632), 4 日(448), 5 月(437), 23 金祝(455)	3~4日は育英祭
2012年12月		6,653	4 火(430)	
2013年1月		6,919	29 日(414)	
2013年2月		6,761	5 日(434), 6 月(807)	6日は大雪
2013年3月		6,169	なし	
年間来訪者数	10,675	69,720	(ユーザ数 年間計 80,395)	

解析ツール  
解析期間  
対象アクセス  
解析サイト  
ユーザ数

Google Analytics

2012年4月1日~2012年5月16日, 2012年5月17日~2013年3月31日

学外からのアクセスのみ

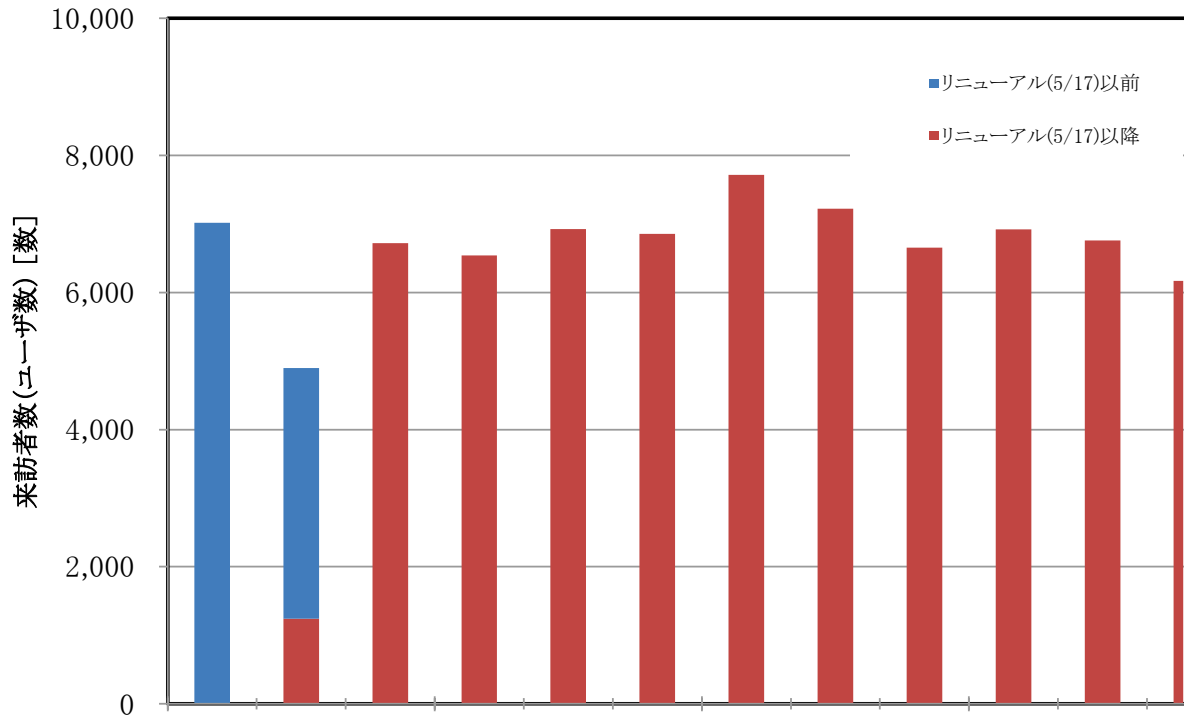
サレジオ高専メイン、SHIP、技術屋メモ

指定した期間にサイトにアクセスしたユーザの数(同じユーザは1回だけカウントされる)

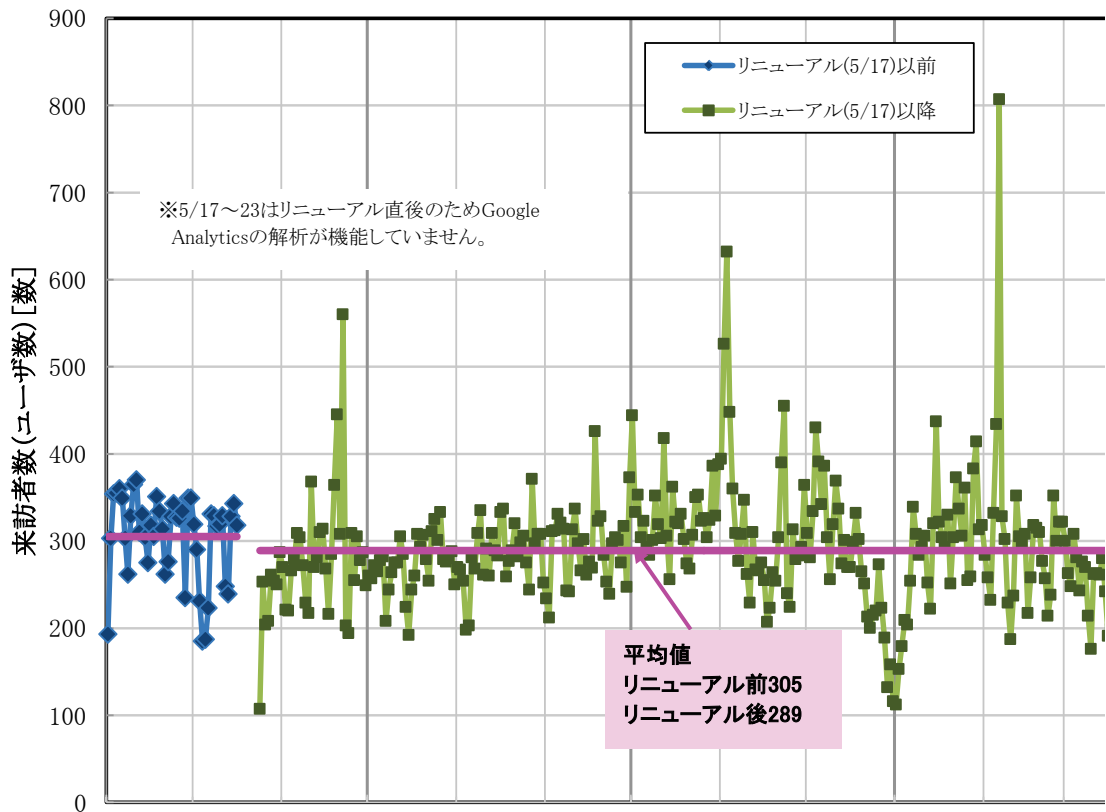
※ 特に来訪者の多かった日として、昨年までと同様400人以上を記録した日を月毎に抽出

⇒ [【ヘルプ】](#) クリック数、訪問数、ユーザー数、ページビュー数、ページ別訪問数の違い

年間来訪者数(2012年4月～2013年3月)



(2) 年間来訪者数(1日単位での集計)



## (3) サイト内年間ページ別セッションランキング

## リニューアル以前

順位	カテゴリ	ページタイトル	ユーザ数
1	(基本)	サレジオ高専 ホーム	6,367
2	学校案内	学校案内 トップ	2,759
3	学科紹介	学科紹介 トップ	2,283
4	キャンパスライフ	キャンパスライフ トップ	1,459
5	(基本)	交通アクセス	1,402
6	中学生・受験生の方へ	中学生・受験生の方へ トップ	1,171
7	技術屋メモ	プラネタリウム・技術屋メモ	762
8	TOPICS	平成24年度 入学式を行いました・TOPICS	752
9	学内の方へ	学内の方へ トップ	735
10	TOPICS	TOPICS トップ	669
11	学校案内	進路状況トップ・学校案内	600
12	SPECIAL	学校案内パンフレット・SPECIAL	570
13	学校案内	サレジオ高専の特長・学校案内	524
14	SPECIAL	SPECIAL トップ	512
15	学校案内	校長からご挨拶・学校案内	498
16	学校案内	2010年度・進路状況・学校案内	475
17	学科紹介	デザイン学科・学科紹介	474
18	学科紹介	教員一覧・一般科目・学科紹介	401
19	学科紹介	機械電子工学科・学科紹介	378
20	学科紹介	教員一覧・電気工学科・学科紹介	356

## リニューアル以降

順位	カテゴリ	ページタイトル	ユーザ数
1	(基本)	<a href="#">サレジオ高専 ホーム</a>	36,949
2	学校案内	<a href="#">学校案内 トップ</a>	15,903
3	(基本)	<a href="#">交通アクセス</a>	14,361
4	学科紹介	<a href="#">学科紹介 トップ</a>	10,448
5	中学生・受験生の方へ	<a href="#">入試情報 トップ</a>	8,360
6	技術屋メモ	<a href="#">プラネタリウム・技術屋メモ</a>	5,988
7	学科紹介	<a href="#">デザイン学科・学科紹介</a>	5,141
8	受験をお考えの方へ	<a href="#">受験をお考えの方へ トップ</a>	5,071
9	学科紹介	<a href="#">電気工学科・学科紹介</a>	3,610
10	学科紹介	<a href="#">情報工学科・学科紹介</a>	3,507
11	学科紹介	<a href="#">機械電子工学科・学科紹介</a>	3,463
12	入試情報	<a href="#">入試・募集日程(本科) - 中学生の方・入試情報</a>	3,147
13	スマートフォン	スマートフォン版 HP ホーム	3,025
14	(基本)	<a href="#">お問い合わせ</a>	2,910
15	イベント情報	<a href="#">育英祭(学園祭) - イベント情報</a>	2,874
16	入試情報	<a href="#">中学生の方 - 入試情報</a>	2,540
17	受験をお考えの方へ	<a href="#">【一覧】中学生向けイベント・受験をお考えの方へ</a>	2,497
18	学内の方へ	<a href="#">学内の方へ トップ</a>	2,409
19	イベント情報	<a href="#">学校説明会 - イベント情報</a>	2,210
20	スマートフォン	(スマートフォン版 HP から PC 版ホームへのアクセス)	1,526

解析ツール

Google Analytics

解析期間

2012年4月1日～2012年5月16日, 2012年5月17日～2013年3月31日

対象アクセス

学外からのアクセスのみ

解析サイト

サレジオ高専メイン、SHIP、技術屋メモ

ユーザ数

指定した期間にサイトにアクセスしたユーザの数 (同じユーザは1回だけカウントされる)

⇒【ヘルプ】[クリック数](#)、[訪問数](#)、[ユーザ数](#)、[ページビュー数](#)、[ページ別訪問数の違い](#)

(4) サイト内年間ページ別セッションランキング—Topics のみ  
リニューアル以前

順位	掲載日	トピックタイトル	ユーザ数
1	2012年4月6日	<a href="#">平成24年度 入学式を行いました</a>	752
2	2012年3月7日	<a href="#">第7回サレジオ高専プロジェクト活動報告会が開催されました</a>	126
3	2012年2月28日	<a href="#">「2011年度 デザイン学科 卒研展」のご案内 (2012/03/03-04 開催)</a>	122
4	2011年1月11日	<a href="#">関東高等専門学校体育連盟(関東体連)総合体育大会にて本校が総合優勝に輝きました</a>	64
5	2012年2月10日	<a href="#">「全国高専デザコン 2011 in 釧路」にて最優秀賞を受賞しました</a>	55
6	2011年4月4日	<a href="#">平成23年度 入学式を行いました</a>	54
7	2012年1月26日	<a href="#">テニス部の最近の活躍(2011年12月～2012年1月)</a>	30
8	2012年2月22日	<a href="#">機械電子工学科の学科プロジェクトチームが「2011 山中湖アートイルミネーションコンテスト」で「テレビ山梨社長賞」を受賞しました</a>	29
9	2011年9月1日	<a href="#">育英高専工業デザイン科9期のクラス会が行われました</a>	29
10	2012年1月27日	<a href="#">専攻科の大藤晃義教授にバイタルリアクトセラピー協会より感謝状が贈呈されました</a>	28
11	2010年7月15日	<a href="#">「故平山吉晴先生を偲ぶ会」が開催されました</a>	28
12	2011年3月8日	<a href="#">講演会「宇宙人文学のすすめ」(講師 中野不二男氏)を開催しました</a>	26
13	2010年4月27日	<a href="#">八王子「第12回フラワーフェスティバル由木」に本校の「人力発電機」を出展します(2010/05/01-02 開催)</a>	25
14	2011年7月26日	<a href="#">テニス部が「2011 高専体育大会」全国大会へ出場決定を果たしました</a>	20
15	2011年12月15日	<a href="#">「第3回大学コンソーシアム八王子学生発表会」において特別賞2件、優秀賞6件、準優秀賞5件を受賞しました</a>	20
16	2010年4月27日	<a href="#">八王子「第6回 学生天国」に吹奏楽部と人力発電機が参加します(2010/05/09 開催)</a>	18
17	2011年5月17日	<a href="#">テニス部の最近の活躍(2011年1月～5月)</a>	18
18	2009年7月16日	<a href="#">テニス部が「2009 高専体育大会」全国大会へ団体戦・個人戦共に出場決定を果たしました</a>	16
19	2010年11月24日	<a href="#">「全国高専デザコン 2010 in 八戸」にて本校2チームが優秀賞を受賞しました</a>	11
20	2012年1月11日	<a href="#">サレジオ高専にモンゴル高専視察団が来校されました</a>	11

解析ツール Google Analytics  
 解析期間 2012年4月1日～2012年5月16日  
 対象アクセス 学外からのアクセスのみ  
 解析サイト サレジオ高専メイン (リニューアル前)、TOPICS 記事  
 ユーザ数 指定した期間にサイトにアクセスしたユーザの数 (同じユーザは1回だけカウントされる)  
 ⇒ [【ヘルプ】](#) クリック数、訪問数、ユーザー数、ページビュー数、ページ別訪問数の違い



## リニューアル以降

順位	掲載日	トピックタイトル	ユーザ数
1	2012年4月6日	<a href="#">平成24年度 入学式を行いました</a>	497
2	2012年12月12日	<a href="#">「高専ロボコン2012」参加報告</a>	377
3	2012年7月13日	<a href="#">剣道部が「2012(平成24)年度関東信越地区高専体育大会」で善戦しました</a>	328
4	2012年11月27日	<a href="#">「全国高専デザコン2012 in 小山」で最優秀賞を受賞しました</a>	320
5	2012年7月27日	<a href="#">陸上競技部が「第47回全国高専体育大会」へ出場決定を果たしました</a>	319
6	2012年5月25日	<a href="#">機械電子工学科の学生が「CQ出版 トラ技 Jr. 2012年5・6月号」に掲載されました</a>	317
7	2012年5月25日	<a href="#">機械電子工学科の学生が「第3回関東甲信越高校生溶接コンクール」に出場し「優秀賞」を受賞しました</a>	303
8	2012年9月19日	<a href="#">専攻科大藤晃義教授、機械電子工学科稲毛達郎助教らの論文がNHKの番組で紹介されました</a>	296
9	2011年1月11日	<a href="#">関東高等専門学校体育連盟(関体連)総合体育大会にて本校が総合優勝に輝きました</a>	293
10	2012年5月24日	<a href="#">「定期公演2011」を開催しました</a>	284
11	2012年11月29日	<a href="#">デザイン学科4年生の3作品が「第二回全国合板・1枚作品コンペ」で入賞、1作品が最優秀賞(林野庁長官賞)を受賞しました</a>	282
12	2013年2月21日	<a href="#">「2012年度 デザイン学科 卒研展」のご案内(2013/03/02-03 開催)</a>	273
13	2012年1月26日	<a href="#">テニス部の最近の活躍(2011年12月～2012年1月)</a>	240
14	2006年11月2日	<a href="#">元校長F.ヘンドリックス先生が「瑞宝中綬章」を叙勲されました</a>	236
15	2012年2月10日	<a href="#">「全国高専デザコン2012 in 小山」で最優秀賞を受賞しました</a>	230
16	2012年10月10日	<a href="#">第2回「アレサふれあいまつり in まちだテクノパーク」に吹奏楽部が演奏参加します(2012/10/13 開催)</a>	225
17	2012年9月12日	<a href="#">本校デザイン学科と電気工学科が近隣小学校のサマースクールに協力しました</a>	223
18	2012年7月18日	<a href="#">機械電子工学科の学科プロジェクトチームが「KAST 青少年科学技術フェスティバル2012」にて公開講座・ものづくり講座を行います(2012/08/18 開催)</a>	211
19	2013年1月16日	<a href="#">2012「第8回 サレジオ高専プロジェクト活動報告会」のご案内(2013/01/19 開催)</a>	203
20	2012年11月22日	<a href="#">山中湖アートイルミネーション「FANTASEUM」への作品出展と見学のご案内(2012/11/23-2013/01/06 開催)</a>	202

解析ツール  
解析期間  
対象アクセス  
解析サイト  
ユーザ数

Google Analytics  
2012年5月17日～2013年3月31日  
学外からのアクセスのみ  
サレジオ高専メイン(リニューアル後)、TOPICS記事  
指定した期間にサイトにアクセスしたユーザの数(同じユーザは1回だけカウントされる)  
⇒【ヘルプ】クリック数、訪問数、ユーザ数、ページビュー数、ページ別訪問数の違い

(5) メインサイト更新件数

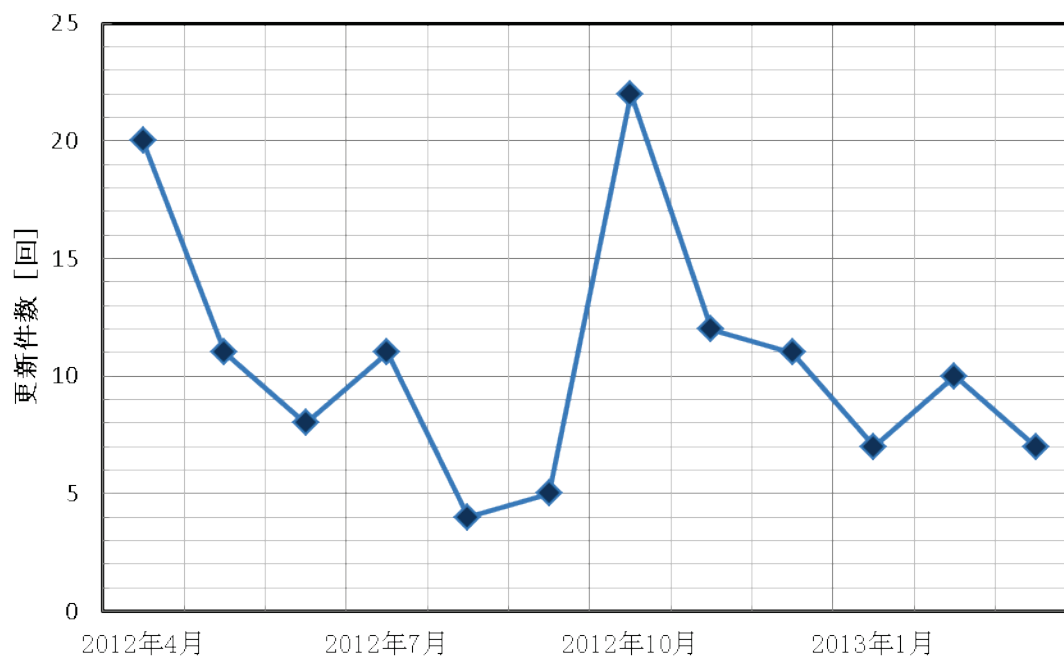
年月	更新数
2012年4月	20
2012年5月	11
2012年6月	8
2012年7月	11
2012年8月	4
2012年9月	5
2012年10月	22
2012年11月	12
2012年12月	11
2013年1月	7
2013年2月	10
2013年3月	7
総計	128

※ 2012年4月～2013年3月の更新件数を「更新履歴」ページを基にカウントした

[⇒サレジオ高専・更新履歴](#)

※ 2012年4月分はリニューアル以前の更新件数

### 年間更新件数



## (6) 検索キーワードからのセッション数ランキング

順位	キーワード	訪問数	新規訪問の割合
1	サレジオ高専	32,110	44.11%
2	(not provided)	12,347	48.74%
3	サレジオ	3,455	52.19%
4	サレジオ工業高等専門学校	2,872	72.18%
5	プラネタリウム 作り方	1,303	86.19%
6	プラネタリウム 自作	1,031	82.93%
7	佐久間 されじお	940	0.00%
8	育英高専	886	73.25%
9	salesio	611	37.64%
10	プラネタリウムの作り方	510	88.82%
11	サレジオ光線	485	7.84%
12	http://www.salesio-sp.ac.jp/	418	8.61%
13	プラネタリウム 製作	392	33.67%
14	自作プラネタリウム	326	75.77%
15	サレジオ高等専門学校	314	59.87%
16	自作 プラネタリウム	305	80.98%
17	サレジオ高専 学費	302	19.87%
18	sarejio	295	18.64%
19	育英工業高等専門学校	294	80.61%
20	育英祭	294	64.97%
21	福井理一	274	1.82%
22	中根 弘之	255	0.78%
23	進路 専攻科 site:www.salesio-sp.ac.jp	233	0.00%
24	サレジオ工業	230	68.70%
25	サレジオ工業高専	225	63.56%

解析ツール Google Analytics  
 解析期間 2012年4月1日～2013年03月31日  
 対象アクセス 学外からのアクセスのみ  
 解析サイト サレジオ高専メイン内 『TOPICS』記事全般  
 訪問数 サイトの訪問数  
 新規訪問数 サイトに初めてアクセスしたユーザの数  
 ⇒ [【ヘルプ】ユニーク ユーザー数と新規とリピーターの違い](#)

※ (not provided) について  
 ユーザが Google.com の機密性の高い環境で検索を行い、その検索結果からサイトにアクセスした場合、検索クエリはレポートに表示されず、「(not provided)」というラベルが表示されます。(Google Analytics ヘルプより)

## 編集後記

総合メディアセンター報第4号をお届けする。今回は本センターにおける「サービスの向上」をキーワードとして先ず米山センター長により情報系の業務の中でも不可欠の作業であるセキュリティ強化に関する現状報告と課題を掲載した。また図書館系の業務の中核ともいべき書籍の配架について和田教育支援課長の力のこもったレポートを得た。利用者のニーズに対してどのように配架するか？という本センターのもつ宿命的な課題の一つの方向性を見出すことができれば今後進むべき道を開いていくヒントとなるだろう。

一方、ハード面においても今夏122教室が新装のPC教室としてお目見えした。これについては平岡副校長による報文が紹介しているが、センターの担う役割が一層重要性を増していることの証左でもある。

一般記事においては加藤電気工学科長より同学科学生の図書館利用の具体的な在り方についての記事を得た。同学科は以前から図書を頻繁に利用する度合いが高く、一見遠い関係であるかのような印象を受ける図書館蔵書と理工系学生とが、実は親近性を持っているという事実に気づかせてくれる。

星野広報係長は新しいネットワークサービスが広報業務において持つ可能性の広がりを見せてくれており、この分野が本校の広報活動においてもどのような展開を見せるか将来的な見取り図を提供してくれる。

また竹下専任講師は自らの専門分野から若者のSNS利用状況と問題点について寄稿されている。メディアの持つ利便性が時に大きな課題をはらむことを改めて利用者に啓蒙する内容である。

コラム欄では先ず長年の御経験にもとづき大藤専攻科長による「情報処理雑感」の寄稿をいただいた。この他花山専任講師の「自作オーディオの楽しみ」、小出准教授の「学生交流会に参加して感じた事」を得た。前者からは懐かしい70年代学生のオーディオブームの思い出がよみがえってくる。後者は現在における学生の活動の状況であるが、共に何かに打ち込む学生時代のみずみずしさが伝わってくる。

最後に山館筆の図書館蔵書の紹介コラムは日本近世と北欧古代に関する歴史書を突拍子もなく時空を隔てて取り上げているが、期せずして両書とも旅にまつわる人の行動を扱ったものとなっている。

メディア博物館探訪では大阪と都内近郊の町田において大衆メディアである新聞経営者とベストセラー出版の作者とのかかわり合いについて述べている。

いずれも執筆者の身近な問題関心の有り方が示されており、それぞれ方向性は異なってもメディアに対する愛情が感じられる内容となっている。ご一読いただければ幸甚である。

総合メディアセンター報 編集長 山館 順

総合メディアセンター報 第4号

平成26(2014)年1月31日 発行

編集発行 サレジオ工業高等専門学校 総合メディアセンター  
〒194-0215 東京都町田市小山ヶ丘 4-6-8  
Tel. 042-775-3020 Fax. 042-775-3021

印刷所 株式会社 芳文社  
〒194-0033 東京都町田市木曾町 2320  
Tel. 042-792-3100 Fax. 042-792-3162

